南坂古墳群

（15号墳他５基）

２００９

岡　山　市　教　育　委　員　会

南坂16号墳　主体部1　人骨出土状況

巻頭図版２

１.南坂16号墳　主体部１　頭骨

２.南坂27号墳　人骨出土状況

序

岡山市は、かつて吉備と呼ばれた地域の中枢を占めています。そして古くから文化の花が開き、現在まで多くの文化財が残されてきました。いま私たちが生活する岡山市の姿は、この地に根付き、それら文化財を残してきた先人たちの歴史の延長にあるといえるでしょう。

南坂古墳群は土石採集にともなって発掘調査されました。調査の結果、未盗掘の主体部を含む、６基の円墳・方墳の存在が明らかとなりました。当地における、古墳時代の葬送儀礼の一端を知ることができたのではないかと思います。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして貴重なご指導を頂きました発掘調査対策委員会の諸先生方、発掘調査にご理解・ご協力を頂きました地元の方々、ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年３月31日

岡山市教育委員会

教育長　山　脇　　健

例　言

1　本書は土砂採集にともない、岡山市教育委員会文化財課が実施した、南坂古墳群（15・16・24・25・26・27号墳）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査にあたり、河原建設工業株式会社から多大なるご協力を頂いた。記して謝意を表します。

3　南坂古墳群は岡山市下足守字椋ノ内944番他に所在する。

4　発掘調査は2005年５月16日～９月２日に実施し、整理作業および報告書作成は、2005年10月から2006年３月まで行った。

5　遺構の記録作業・トレースは河田健司・西田和浩が行い、遺物の実測・トレースは山元尚子・西田和浩が行い、写真撮影は西田が行った。

6　本書に用いた高度地は標準海抜高度である。座標は平面直角座標第Ｖ系（世界測地系）を用いており、方位は座標北を示す。

7　報告書抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。

8　図２は国土地理院発行の1/50000地形図「総社東部」を複製しさらに「改訂岡山県遺跡地図第６分冊岡山地区」の遺跡範囲と遺跡名を加筆・修正したものである。

9　本書の執筆・編集は西田が行った。

10　報告書の作成にあたって、人骨の所見は岡山理科大学理学部の名取真人氏に、赤色物の分析は岡山理科大学自然科学研究所の白石純氏にお願いした。

11　出土遺物・実測図・写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

凡　例

1　報告書掲載の遺物には、以下の略記号を用いている。
金属製品：Ｍ

2　掲載遺物の縮尺は、以下の通りである。
土器（Ｓ＝1/3）※図19の土器棺Ｓ＝1/5　　金属製品（Ｓ＝1/2）

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
第１章　遺跡の位置と環境……1
第２章　調査の経緯と推移……5
第１節　調査の経緯……5
第２節　経過と概要……7
第３節　日誌抄……7
第３章　遺構と遺物……9
第１節　遺跡の概要……9
第２節　遺構と遺物……9
１．南坂15号墳・26号墳……9
２．南坂16号墳・24号墳・25号墳……18
３．南坂27号墳……27
４．その他の遺物……30
第４章　まとめ……31
付　載　南坂16号墳出土赤色物について……34
遺物観察表……36
図版
報告書抄録

図　目　次

図１　遺跡位置図（1/200000）……1
図２　主要遺跡分布図（1/25000）……2
図３　調査区位置図（1/2500）……6
図４　調査区全体図（1/500）……10
図５　調査区断面図（1/200）……11
図６　15号墳・26号墳　平面図（1/200）……12
図７　15号墳・26号墳　墳丘断面図（1/100）……13
図８　15号墳　主体部　平・断面図（1/40）……14
図９　15号墳　供献土器1・2・3平面図（1/20）……14
図10　15号墳・26号墳　出土遺物（1/3）……15
図11　26号墳　主体部　平・断面図（1/40）……16
図12　16号墳・24号墳・25号墳　平面図（1/200）……17

図13 16号墳　主体部１　平・断面図（1/40）‥‥18
図14 16号墳　主体部１　遺物出土状況（1/20）‥19
図15 16号墳　主体部２　平・断面図（1/40）‥‥20
図16 16号墳　主体部３　平・断面図（1/40）‥‥21
図17 24号墳　主体部　平・断面図（1/40）‥‥‥22
図18 24号墳　土器棺墓出土状況（1/20）‥‥‥‥23
図19 土器棺実測図（1/5）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥24
図20 24号墳　供献遺物出土状況（1/20）‥‥‥‥25
図21 鉄鎌実測図（1/2）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥25
図22 高杯実測図（1/3）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥25
図23 25号墳　主体部　平・断面図（1/40）‥‥‥26
図24 27号墳　平面図（1/200）‥‥‥‥‥‥‥‥‥27
図25 27号墳　主体部　平・断面図（1/40）‥‥‥26
図26 27号墳　主体部　遺物出土状況（1/40）‥‥26
図27 27号墳　出土遺物（1/2）‥‥‥‥‥‥‥‥‥29
図28 その他の遺物（1/3）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥30
図29 下足守で発掘・測量された古墳分布図
（1/10000）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥31

表　目　次

表１ 南坂古墳群埋葬施設一覧表‥‥‥‥‥‥‥‥32
表２ 長坂古墳群埋葬施設一覧表‥‥‥‥‥‥‥‥32
表３ 一国山古墳群埋葬施設一覧表‥‥‥‥‥‥‥32
表４ 南坂古墳群出土鉄器観察表‥‥‥‥‥‥‥‥36
表５ 南坂古墳群出土土器観察表‥‥‥‥‥‥‥‥36

図　版　目　次

巻頭図版１　南坂16号墳　主体部１　人骨出土状況
巻頭図版２　１　南坂16号墳主体部１　頭骨
　　２　南坂27号墳　人骨出土状況
図版１　１　調査区北半（堀家純一氏撮影）
　　２　調査区南半（堀家純一氏撮影）
図版２　１　15号墳主体部（西から）
　　２　26号墳主体部（南西から）
図版３　１　16号墳・24号墳全景（堀家純一氏撮影）
　　２　16号墳　主体部２検出状況（東から）
　　３　16号墳　主体部２粘土除去後（東から）
図版４　１　石棺検出状況（北西から）
　　２　埋土断面（東から）
　　３　人骨確認状況
図版５　１　主体部1　蓋石除去直後
　　２　主体部1　拡大
　　３　主体部3　（北西から）
図版６　１　主体部（北から）
　　２　土器棺検出状況（南東から）
　　３　供献土器出土状況（西から）
図版７　１　25号墳主体部（南から）
　　２　27号墳石棺検出状況（東から）
図版８　１　主体部　人骨検出状況（南西から）
　　２　鉄剣出土状況
　　３　出土鉄剣
図版９　　出土遺物

第１章　遺跡の位置と環境

岡山市北西部の吉備高原に源を発する足守川は、山間を脱し岡山平野に流れ出す部分に沖積平野を形成する。その沖積平野と東側に横たわる吉備高原の山塊部分が、足守とよばれる地域である。今回調査した南坂古墳群は、この吉備高原端部の丘陵上に展開している。

足守地域は昭和46年に岡山市と合併する以前、御津郡足守町として独立した行政区画を形成していた。南坂古墳群が所在する下足守地区も、明治22年に上足守、下足守、上土田の足守川東岸域の３村が合併して、足守村を発足させるまでは、下足守村として地域的・行政的にまとまりのある単位を構成していた。

調査地点の立地する下足守地域周辺における人間の生活は、足守深茂遺跡（岡山市教育委員会2002）や余町遺跡において、縄文時代後期の土器が出土しており、この頃まで遡ることができる（小郷ほか1990）。そして足守庄関連遺跡からは、縄文時代晩期の突帯文土器を伴う遺構も確認されており（草原1994）、縄文時代の終わりには、丘陵・山塊から平野部へ開発が広がっていったものと推測される。

弥生時代に入ると、上記の足守庄関連遺跡や足守深茂遺跡において、該期の遺構・遺物が出土している。また南坂８号墳の南西部に位置し、岡山市教育委員会により発掘調査の行われた南坂遺跡においても弥生時代中期中葉～中期後半の土器が出土している（岡山市教育委員会1984）。このような出土遺物によって、縄文時代晩期から弥生時代中期まで、人々の営みが連綿と継続していたことは窺えるものの、具体的な様相ははっきりしない。弥生時代後期に至ると、遺跡数・遺物量ともに前代と比較して増加する傾向がみられる。上述の南坂遺跡からは複数の住居跡が検出され、集落の一端が明らかとなった（岡山市教育委員会1984）。上述の足守深茂遺跡では、該期の遺構・遺物が、上土田足守遺跡（小郷ほか1995）、上土田門前遺跡（間壁1973）では該期の遺物が採取されている。そして弥生時代後期後半には経塚弥生墳丘墓、生石神社裏山１号墳（弥生墳丘墓）、浦尾９号墳（弥生墳丘墓）（近藤1991）などが、北や東側の山塊・丘陵上の足守地域の平野を見下ろす位置に築かれる。岡山市教育委員会より発掘調査された経塚弥生墳丘墓は、東西８ｍ南北12の方墳で特殊壺・特殊器台が出土している（出宮・神谷1980）。これらの墳丘墓の築造と、足守地域における遺跡数の増加との間には密接な関係があるものと推測される。

古墳時代にはいると、足守地域には下足守地区の南坂８号墳（河田ほか2006）などの、全長20～30ｍの前方後方墳が築造される。またその尾根上には、南坂９号墳などの10～20ｍの古墳が多数築かれるようになる。これらの中には、突出した規模の墳丘をもつものは認められない。これは下足守地区を含む足守地域が、他から突出した規模の墳丘を築き、権力の集中する集団の存在を窺わせる地域とは異なっていたことを推測させる。そして前方後方墳と他の古墳との差異が、墳形以外に認められな

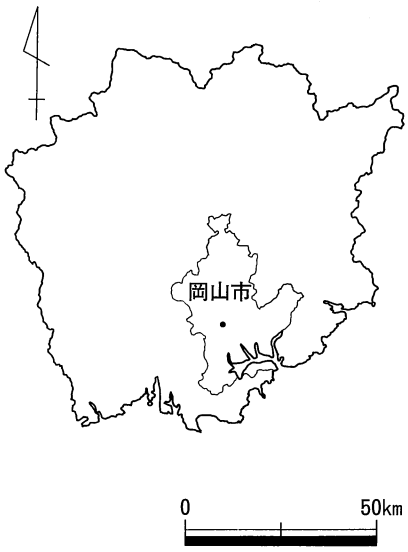


図１　遺跡位置図

1：南坂古墳群（15号墳他）　2：余町遺跡　3：足守深茂遺跡　4：冠山城　5：南坂遺跡
6：三井谷遺跡　7：一国山城跡・一国山古墳群　8：長坂古墳群　9：延寿寺跡　10：大崎古墳群
11：上土田鶴免遺跡　12：大崎廃寺

図２　主要遺跡分布図（S=1/25000）

いことから、これらの前方後方墳は盟主的なものでないと推測され、足守地域内においては複数の「小」盟主的な権力者の下に、古墳を築造することのできる複数の集団が存在していたとも考えられる。三井谷の奥の標高180mほどの尾根上に位置する長坂古墳群は、岡山市教育委員会によって1・2・3号墳が調査されており、古墳時代前期における小盟主に帰属する小古墳群の様相が明らかになっている（草原1999)。これらの前期古墳は、平野を見下ろす丘陵上に位置しており、これに対応する該期の集落は、上記の上土田鶴免遺跡から古墳時代前期の土器を伴う土壙が検出されているものの、それ以外は調査例がなく詳細は不明である。古墳時代後期には横穴式石室をもつ古墳が多数築かれるようになる。その中には、長坂7号墳のように石室全長が10mを越えるものもいくつかみられる。それらは前半期の古墳とは異なり、特に三井谷周辺の三井谷奥古墳群や大塚古墳群のように、谷地形に面した斜面集中する傾向がみられる。一方、南坂遺跡で確認された多数の玉類を伴う石室墓のように(岡山市教育委員会1984)、前半期古墳の周辺部に築造される該期の埋葬施設も認められる。

古代の下足守地区は、備中国賀陽郡足守郷に属する。賀陽郡は吉備五国造の一つ、賀夜氏の本拠地とされる。続日本紀によれば、天平神護元年（756）6月には賀夜氏一族の賀陽（続日本紀、日本後記では賀陽と表記。以下それに従う。）臣小玉女が朝臣の姓を賜ったと記されており（註1)、また日本後記によれば、大同三年（808）には式部大輔賀陽朝臣豊年が下野守に兼任されていることから（註2）賀陽氏は8世紀後半から9世紀にかけて、四位五位クラスの官人を輩出しており、中央との結びつきのある一族といえる。さらに8世紀前半の官人の中にも賀陽氏の名がみられ（註3)、その結びつきはさらに遡る可能性もある。その一方で8世紀前半には、「善家異記」にみられる賀陽郡大領豊仲、統領の豊蔭、吉備津神社禰宜の豊恒、国府の少目の官位を金で買ったとされる良藤などの人物が、賀陽郡内において要職を独占し富を蓄積していった様子も窺える（門脇1989)。古代後半、下足守地区を含む足守地域は、「足守庄」として荘園化されている。京都神護寺所蔵「備中国足守庄絵図」の裏書きには嘉応元年（1169）に四至を確定し絵図を作成したことが記されており、足守庄はこのころまでに立庄されていたことを窺わせる。足守地区は現在も絵図に描かれた景観が良く残っており、該期の遺跡の調査は、足守庄関連の遺跡を中心に実施されている。上記の足守庄（足守幼）関連遺跡の調査では、条里水田内の調査を実施し、条里水田にともなう溝等の遺構が確認され、条里水田の成立過程が明らかになった（草原1994)。また、上土田地区の足守庄南半に位置する延寿寺跡の調査では、古代～中世の木棺墓、井戸、柱穴、溝などが確認されている（出宮・根木1979)。そして、大井地区にある、「備中国足守庄絵図」において「大井御庄境藤木山」と記された、牓示の可能性をもつ立石遺構の調査では、この遺構は絵図に描かれた牓示の可能性が極めて高いと判断されている(出宮・神谷1980)。

中世の遺跡は、南坂遺跡、延寿寺跡、すくも山遺跡において調査されている。すくも山遺跡からは多数の中世墓が検出され、14世紀前半～16世紀にかけての中世墓の変遷およびそれにともなう骨蔵器の変遷が明らかになっている（草原1998)。中世後半の戦国時代における足守地域は、東の織田氏と結んだ宇喜多氏と、西の毛利氏との勢力圏の接点、いわゆる「境目」となる。備中国は、備中国守護職細川氏の下で南北朝合一後15世紀後半まで、隣接する備前・美作や播磨よりも比較的安定していたと考えられる（水野1991)。しかし寛正元年（1460）に細川勝久が守護職を継承した後、文正二年（1467）に勃発した応仁の乱以降国内は不安定になり、延徳三年（1491）から明応元年（1492）にかけて起こった守護代荘元資による反乱により、細川氏の勢力は衰えていった。その後、備中国は国人

領主である石川・三村・多治部・庄氏などが台頭し、その中の庄為資は在国守護上野頼氏を松山城に滅ぼして、備中国最大の国人領主となる。しかしその後は山陰の尼子氏、西の毛利氏の進出により在地勢力が成長することはなく、在地国人領主層はそれら国外の大名勢力とそれぞれが結びついて、備中国は複雑な様相を呈するようになる。そして最終的には西の毛利氏と東の織田氏の最終決戦の場となるのである。足守地域で起こった毛利氏対織田氏の著名な戦闘は、備中高松城水攻めの前哨戦として戦われた「冠山城の戦い」であろう。冠山城は下足守地区の三井谷入り口に位置する。『中国兵乱記』によれば毛利方の山城であるが、織田方は天正十年（1582）にこの城を攻め落としている。この時に織田方が陣を張ったと推測されるのが一国山城である（河田ほか2006）。足守地域には冠山城の他に、大井の鍛冶山城、宮路山城、日近の日近城等、室町期から織豊期と推測される城跡が点在している。その中の、すくも山遺跡における発掘調査では、３つの郭と堀切、石積等が検出され冠山城の出城の遺構と推測されている（草原1998）。

近世は足守藩に属し、藩主木下氏の支配下にはいる。藩祖木下家定は、豊臣秀吉の正室高台院（北政所）の兄であり慶長六年（1601）、姫路から移封され足守藩を立てた。その後木下家は一時所領を没収されていた時期もあるが、幕末まで藩主として足守地域を治めている。足守の町並みの中に位置する、足守藩陣屋町遺構の発掘調査では、陣屋町が形成されたと推測される17世紀後半の遺構は検出されていないが、18世紀後半～19世紀の武家屋敷の遺構が検出されている（高橋2001）。そして、下足守地区は基本的に水田景観を呈しており、その風景は現在まで続いていると考えられる。

註

１）六月辛酉朔備中国賀陽郡人外従五位下賀陽臣小玉女等十二人賜姓朝臣（原文）
２）式部大輔従四位下賀陽朝臣豊年為兼下野守（原文）
３）賀陽臣兄人（鼓吹大令史）賀陽臣田主（造東大寺司史生）（門脇1989）

参考文献

岡山市教育委員会1984『南坂１号墳・南坂遺跡発掘調査現地説明会資料』
岡山市教育委員会2002『岡山市埋蔵文化財センター年報１　2000（平成12）年度』岡山市教育委員会
門脇禎二1989「吉備の官人群像」『岡山県史　古代Ⅱ』岡山県
小郷利幸ほか1990「岡山市足守地域の地域史研究（１）」『古代吉備』第12集　古代吉備研究会
小郷利幸ほか1995「岡山市足守地域の地域史研究（３）－弥生時代と古墳時代前期・中期－」『古代吉備』第17集　古代吉備研究会
河田健司ほか2006『南坂８号墳・一国山城跡・一国山古墳群　－下足守地内遺跡発掘調査等事業に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会
草原孝典1994『足守庄（足守幼）関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
草原孝典1995『足守藩武家屋敷跡』岡山市教育委員会
草原孝典1998『すくも山遺跡』岡山市教育委員会
草原孝典1999『長坂古墳群』岡山市教育委員会
高橋伸二2001『足守藩武家屋敷跡・Ⅱ－足守小学校プール建設に伴う発掘調査報告－』
出宮徳尚・根木修1979『足守庄荘園遺構緊急調査・延寿寺跡第２次調査概報』岡山市教育委員会
出宮徳尚・神谷正義1980『足守庄荘園遺構緊急調査牓示比定遺構発掘調査概報』岡山市教育委員会
間壁忠彦1973「足守上土田採集の弥生土器」『倉敷考古館研究集報』第８集　倉敷考古館
水野恭一郎1991「守護の領域支配と国人」『岡山県史　中世Ⅱ』岡山県

第２章　調査の経緯と推移

第１節　調査の経緯

岡山市下足守地区は、尾根上から山裾部の緩斜面に弥生時代以来の集落遺跡や集団墓群、尾根上に弥生時代末～古墳時代前期を中心とする中小規模の墳墓群、そして谷部の斜面などに古墳時代後期の横穴式石室墳が群集する特異な地域である。また、「足守庄絵図」に象徴されるように古代から開発され、中世には備中高松城の水攻めに代表されるように、織田・毛利両勢力の拮抗する最前線となっていた。一方、この一帯の丘陵は花崗岩を基盤としており良質の真砂が採取できる環境にある。そのため真砂土採取業者による大小の開発事業が行われてきた地域であり、埋蔵文化財との競合は避けられない事態となっているのが現状である。

調査対象地は三井谷にむけて北に延びる、標高約85ｍの尾根上にある。周辺は尾根上に４世紀から５世紀代の古墳が数多く築かれており、谷部にも６世紀後半～７世紀代の横穴式石室墳が三井谷の奥～北側斜面を中心に多数存在する。

当該地における土砂採集計画にともない、1983年刊行の『岡山市埋蔵文化財分布地図』では、南坂15号墳・南坂16号墳などの古墳が記載されていることから、事業計画地における埋蔵文化財の保護について、当教育委員会文化課（当時）と河原建設工業株式会社で協議を行い、詳細な分布調査を実施した。その結果、当教育委員会文化課は数基の古墳の存在を指摘し、平成12年１月31日付、岡市教委文第856号「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について（通知）」で通知するとともに、その現状保存を指導した。

しかしながら、そのうち３基については計画地のほぼ中央を占めており、現状で保存することが困難であることから、河原建設工業株式会社は発掘調査による記録保存を要望することとなった。要望を受け、当市教育委員会文化財課は具体的な発掘調査計画のため、平成16年７月７日に現地踏査を実施した。その結果、３～４基の古墳の可能性のある高まりを確認し、それに基づき発掘調査計画を作成、費用負担等について協議し、平成17年度に調査期間約４ヶ月として調査実施と費用負担について合意した。

発掘調査は平成17年５月16日に着手し、平成17年９月２日に終了した。着手後、岡山市教育委員会教育長から岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第99条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」が提出された。発掘調査面積は600㎡である。

発掘調査組織

発掘調査主体者　　岡山市教育委員会教育長　山根文男

発掘調査対策委員　　稲田孝司（岡山大学教授）
亀田修一（岡山理科大学教授）
西川　宏（前岡山理科大学講師）

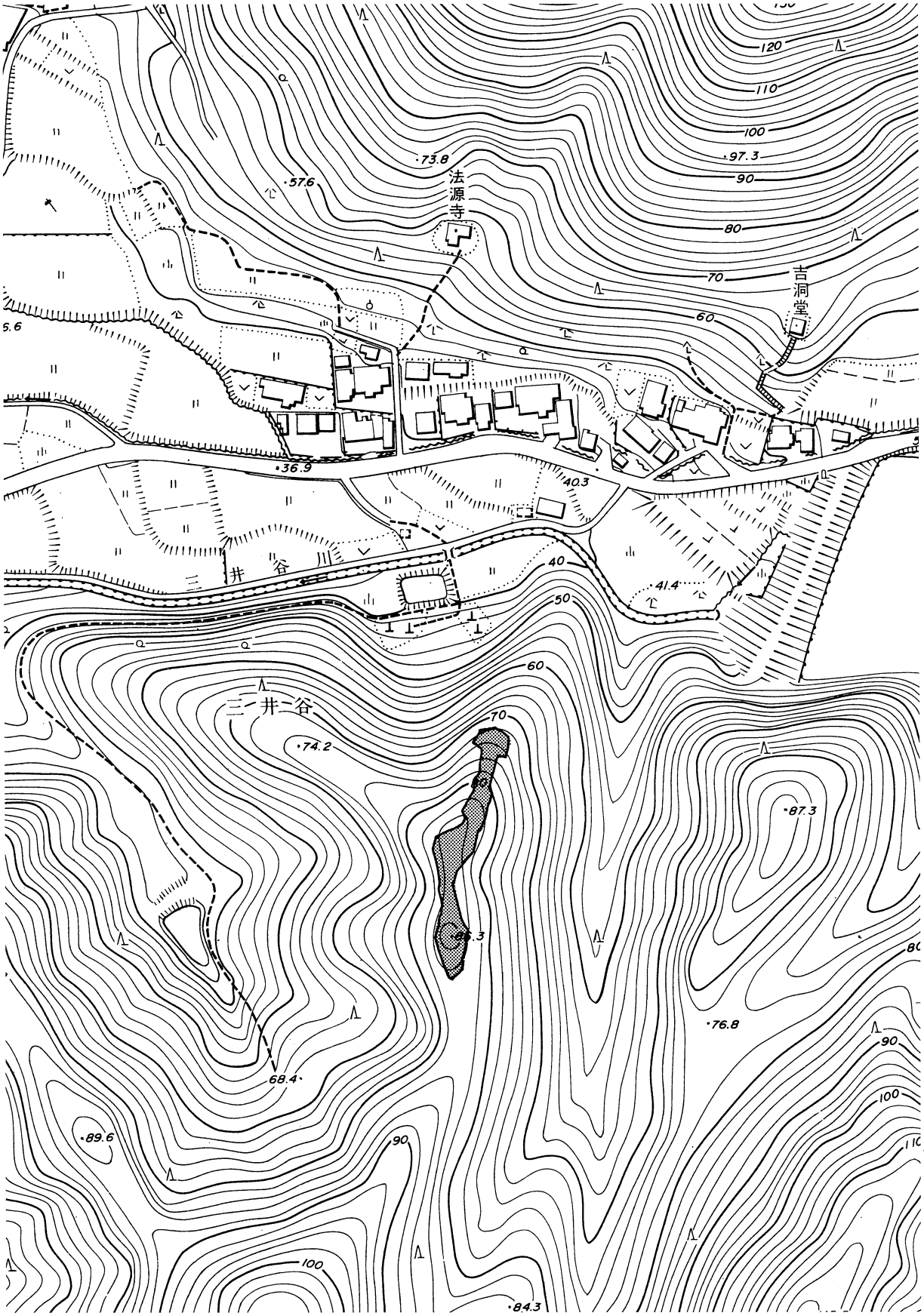


図３　調査区位置図（S=1/2500）

間壁忠彦（倉敷考古館館長）
水内昌康（前岡山市文化財保護審議委員会会長）

発掘調査担当者　根木　修（岡山市教育委員会文化財課課長）
出宮徳尚（岡山市教育委員会文化財課専門監）
神谷正義（岡山市教育委員会文化財課副専門監）
草原孝典（岡山市教育委員会文化財課主任）
安川　満（岡山市教育委員会文化財課文化財保護主事）

調査員　河田健司（岡山市教育委員会文化財課文化財保護主事）
西田和浩（岡山市教育委員会文化財課文化財保護主事補）

経理員　柿本貴子（岡山市教育委員会文化財課主事）

出土物整理員　山元尚子

（役職名は平成17年度当時）

第２節　経過と概要

調査着手前に樹木伐開、表土剥ぎを行った。平成16年度に実施した踏査では３～４基の墳丘状の高まりを確認しており、本調査においても４基程度の古墳が確認されるものと予想された。
調査の結果、分布地図に記載された15・16号墳の他にあらたに４基の古墳と土器棺を確認するに至った。調査の過程で明らかになった古墳は、新たに24～27号のナンバーを付した。

５月16日より、作業員５人で最も標高の高い南坂16号墳から調査に着手し、その後24号墳・25号墳・15号墳・26号墳・27号墳と調査を進めていった。古墳はすべて地山削り出しによって形成されている。26号墳を除く５基の古墳の主体部は、いずれも墓壙上面に盗掘坑らしきものがみあたらず、これらは未盗掘の古墳であったと推測される。しかし、我々の期待とは裏腹に、出土した遺物は非常に乏しかった。27号墳から出土した２本の鉄剣が唯一の副葬品であった。

第３節　日誌抄

５月　６日（金）～７日（土）	表土掘削
５月１６日（月）	作業員５人で１６号墳調査開始
５月１７日（火）	尾根南側に測量杭設置
５月１８日（水）	土器棺検出・調査開始　測量杭設置
５月２３日（月）	１６号墳埋葬施設、２４号墳調査開始。
６月　１日（水）	２５号墳調査開始。尾根南側地形測量開始。
６月　８日（水）	供献土器調査開始、土器棺調査終了。

6月17日（金）	16号墳埋葬施設写真撮影、人骨取り上げ。尾根北側測量杭設置
6月24日（金）	15号墳埋葬施設確認。
6月28日（火）	24号墳調査終了。
6月29日（水）	尾根北側トレンチ設定、表土剥ぎ、掘削開始。
6月30日（木）	尾根南側地形測量終了。
7月　7日（木）	第1回対策委員会。
7月12日（火）	26号墳調査開始。
7月15日（金）	15・26号墳地形測量開始。
7月20日（水）	15・26号墳掘り上がり写真撮影。
7月26日（火）	27号墳調査開始。25号墳終了。尾根北側トレンチ掘削表土剥ぎ終了。
8月　9日（火）	27号墳周辺地形測量開始。
8月12日（金）～17日（水）	作業員休み。
8月19日（金）	堀家純一氏のラジコンヘリによる空撮。
8月22日（月）	16号墳・27号墳調査終了。
8月25日（木）	第2回対策委員会。
9月　2日（金）	器材撤収、発掘調査終了。

第３章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要

当該地は、西に足守平野を見下ろす、北に延びる尾根上に位置する。今回土砂採取の対象となった地点は南坂古墳群に含まれる地域であり、南坂15号墳・16号墳が確認されている。この他、対象地の尾根上には人為的な高まりや平坦面がみられるなど、さらなる未確認の古墳の存在が予想された。

発掘調査の結果、15号墳・16号墳とともに、小規模な円墳１基（26号墳）・方墳３基（24号墳・25号墳・27号墳）・土器棺墓１基を発見した。墳丘はいずれも地山削り出しによって形成されており、盛土の痕跡がみられるものはなかった。調査区内の中で最も高所に作られたのが16号墳である。規模も今回調査した中では最大であり、また主体部を３基有しており、他との違いが際立つ古墳である。今回調査した支群の中では中心となる古墳と考えられる。

調査区内で確認した古墳は、16号・24号・25号墳で構成されるもの、15号墳・26号墳で構成されるもの、そして27号墳のみという、大きく３つの単位に分類できそうである。主体部は木棺墓が５基（15号墳、16号墳主体部２・３、24号墳、25号墳）、箱式石棺が３基（16号墳主体部１、26号墳、27号墳）、土器棺が１基（24号墳）となる。さらに木棺墓のうち、上部を粘土で被覆するものが２基確認できた（16号墳主体部２、25号墳）。木棺の型式は福永伸哉氏の分類を参考にすると（福永1987）、墓壙底面に溝状掘り込みをもつＩ型木棺（15号墳、24号墳）、底板の横断面がＵ字状を呈するもの（16号墳主体部２・３、25号墳）に二分できそうである。上部を粘土で被覆された棺は、いずれも底板がＵ字状を呈する型式であり、粘土被覆と棺型式の間に何らかの関連があると推測される。

26号墳の箱式石棺以外は、表土を剥いだ段階で明瞭に墓壙の掘り方が確認できた。盗掘坑らしきものはみられず、未盗掘であった可能性が高い。しかし、出土遺物は非常に少なく、供献土器、27号墳の副葬品である２本の鉄剣の他は16号墳主体部１と27号墳から出土した２体分の人骨のみであった。時期の特定できる副葬品に乏しいため、本古墳群の詳細な築造時期を推定するのは困難であるが、供献土器を参考にすると古墳時代中期を中心とする時期に形成されたと考えられる。

第２節　遺構と遺物

１．南坂15号墳・26号墳

（１）南坂15号墳

古墳の構造（図６・７）

調査区のほぼ中央、標高約84mに位置する。東西約11m、南北約８m、残存高は約0.6mを測る。不整形な方墳と考えられる。断面観察から、墳丘に旧地表や盛土の痕跡は認められないため、基本的に地山削り出しによって作られたものと判断する。26号墳との間にある区画溝を除いて、葺石など明確な墳端が存在しないため、平面形はどの部位を測定するかで若干の差異が生じる。現状では削り出しの傾斜変換点を墳端としている。墳丘中央に主体部が１基確認されたほか墳端付近から供献土器が３箇所確認できた。主体部から遺物が出土していないため、これらの供献土器から年代を考えると本墳は古墳時代中期に築造されたものと推測される。

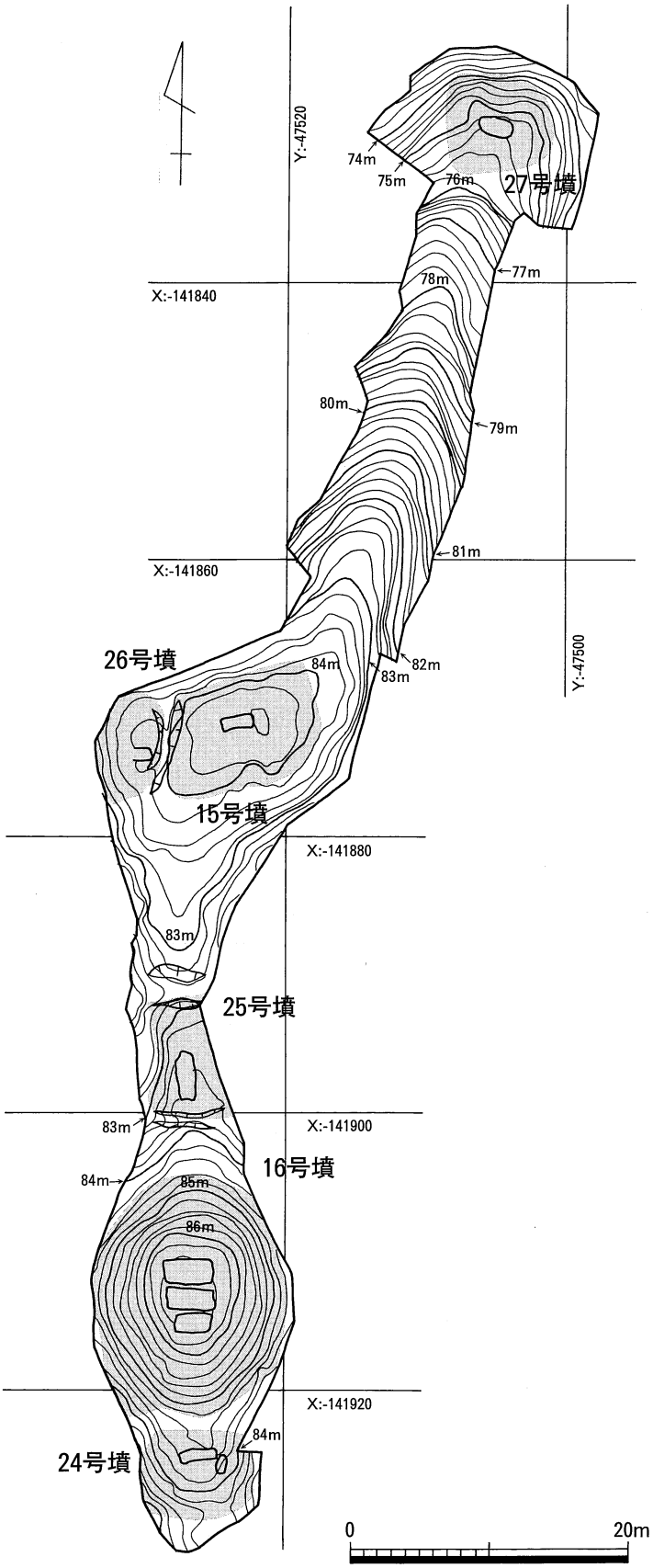


図４　調査区全体図（S=1/500）

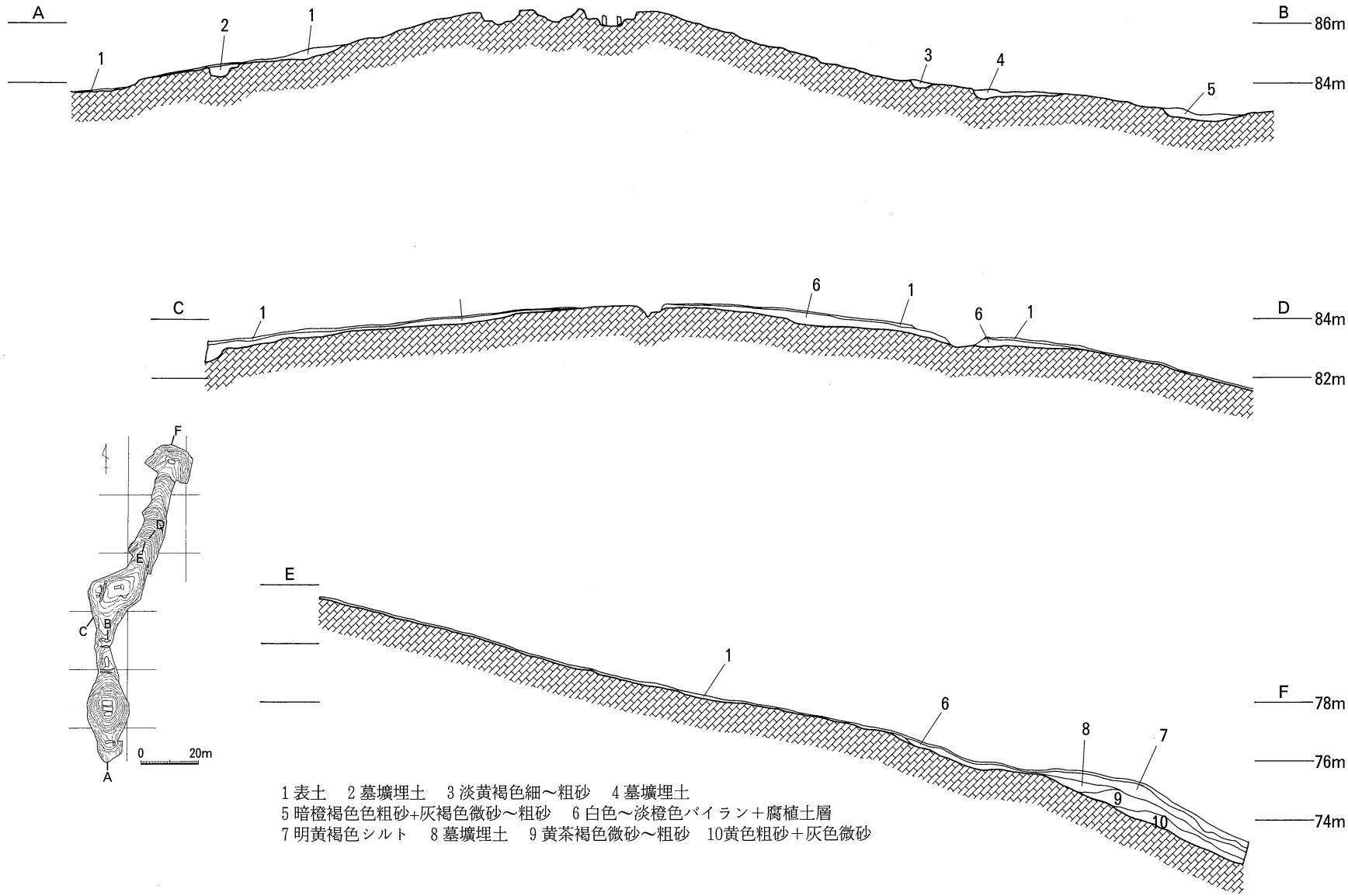


図５　調査区断面図（S=1/200）

主体部（図８）

墳丘中央に東西方向へ長軸をとる埋葬施設が１基確認された。樹根以外の人為的な攪乱がみられないため、未盗掘であったと考えられる。墓壙の規模は長さ2.3m、幅0.7mを測る。木棺痕跡は確認できなかったものの、墓壙の底に両小口と側壁と考えられる掘り込みをわずかに確認した。副葬品等は出土していない。

出土遺物（図９・10）

15号墳の北東部および26号墳との区画溝から供献土器が出土している。時期はいずれも古墳時代中期と考えられる。供献土器２・３には接合関係がみられる。**１・２**は土師器（図９供献土器１）、３（図９供献土器２・３）は須恵器である。**１**は高杯の杯部で脚部を欠失している。**２**は甕で、内面ヘラケズリが頸部付近まで確認される。**３**は初期須恵器の甕である。口縁部外面に波状文を施し、内面は叩き具の痕跡をナデ消している。ＴＫ208併行期の所産と考えられる。

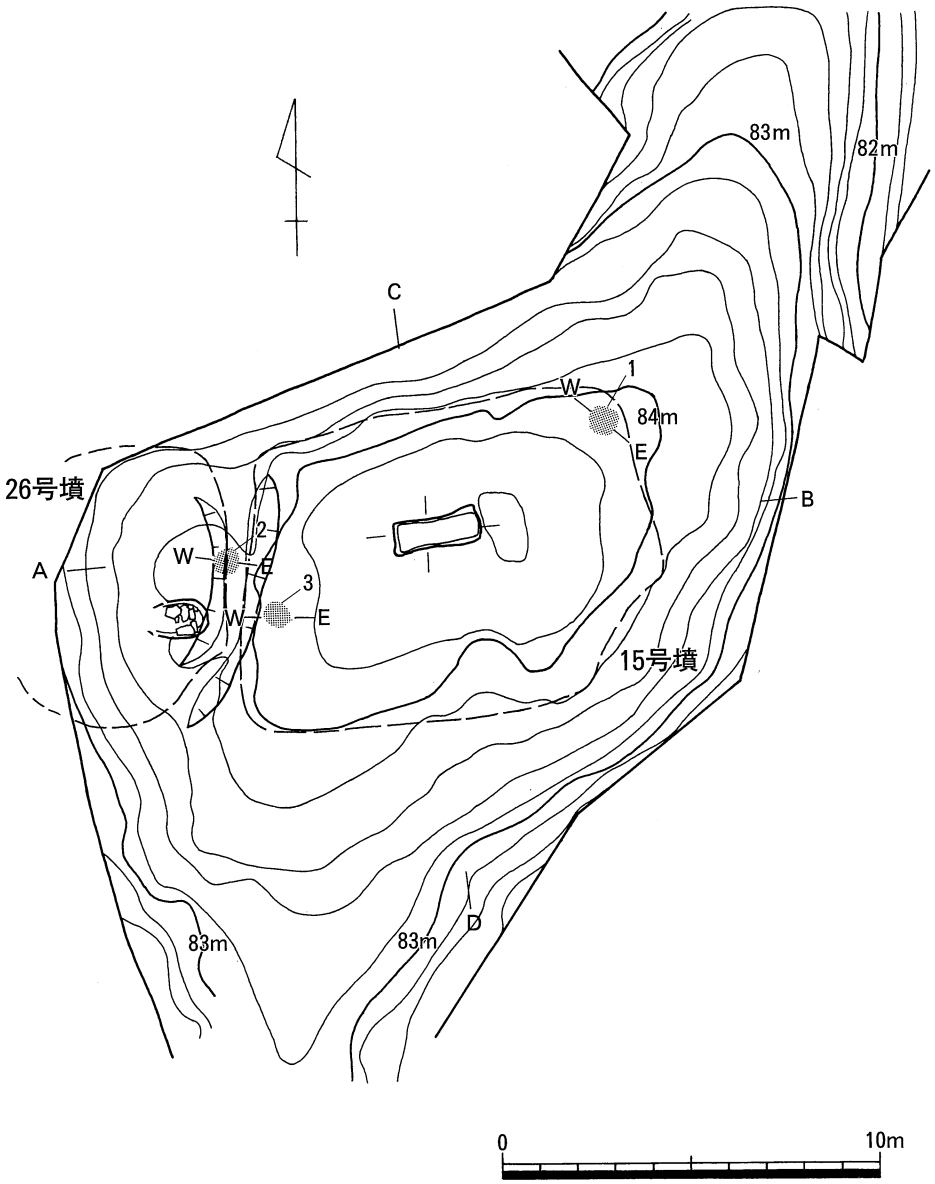
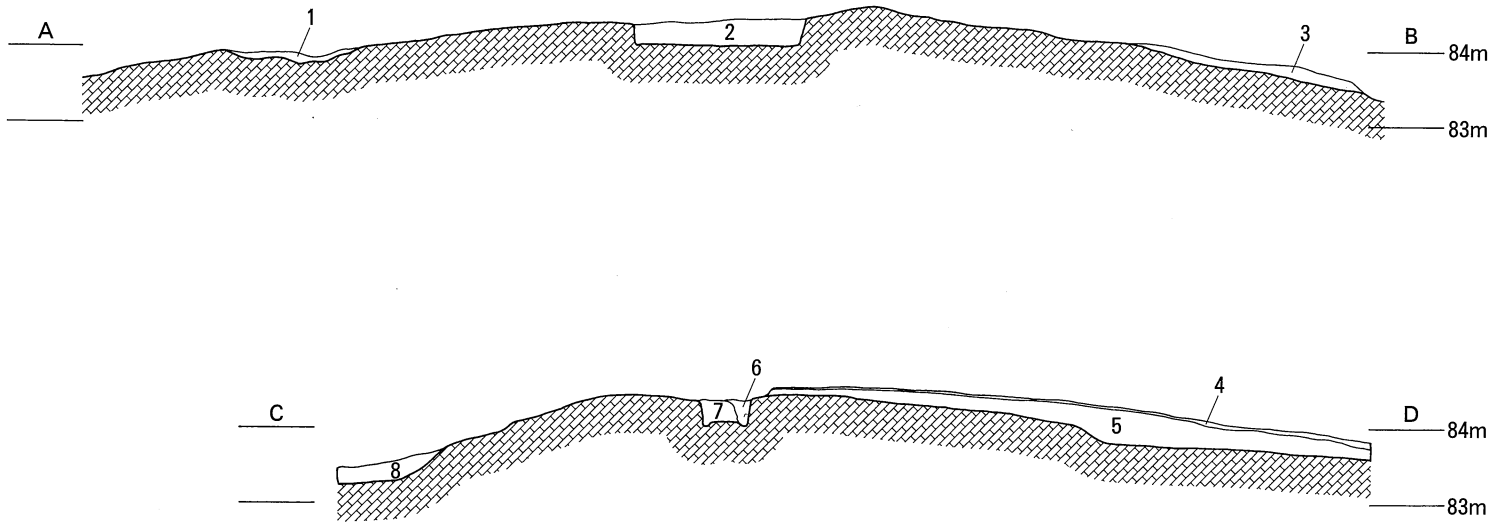


図６　15号墳・26号墳　平面図（Ｓ=1/200）



1 淡黄褐色微砂～シルト（周溝埋土）　2 墓壙埋土　3 淡黄褐色細～粗砂　4 表土　5 明黄～白色バイラン土　6・7 墓壙埋土
8 淡黄褐色細～粗砂（流土）

図7　15・26号墳　墳丘断面図（S=1/100）

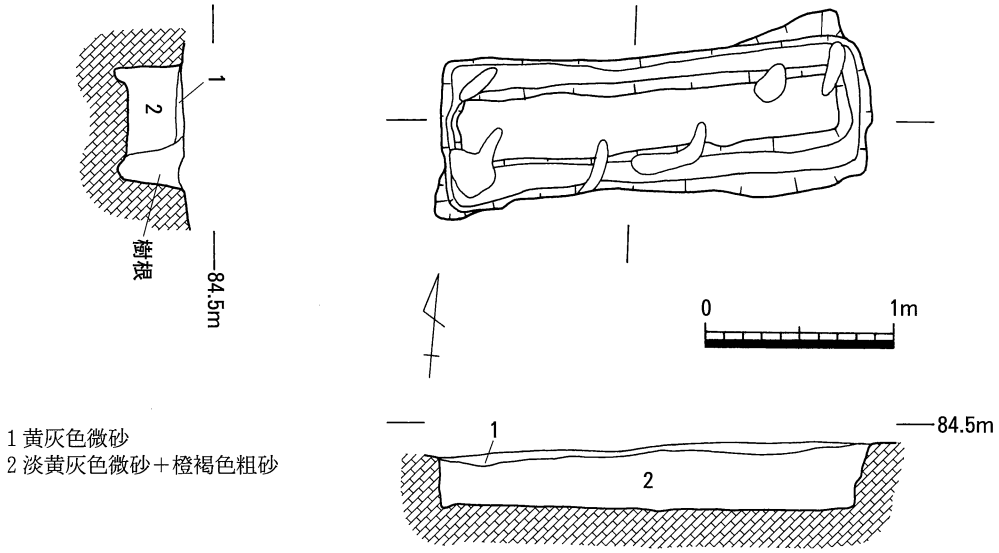


図８　15号墳　主体部　平・断面図（S=1/40）

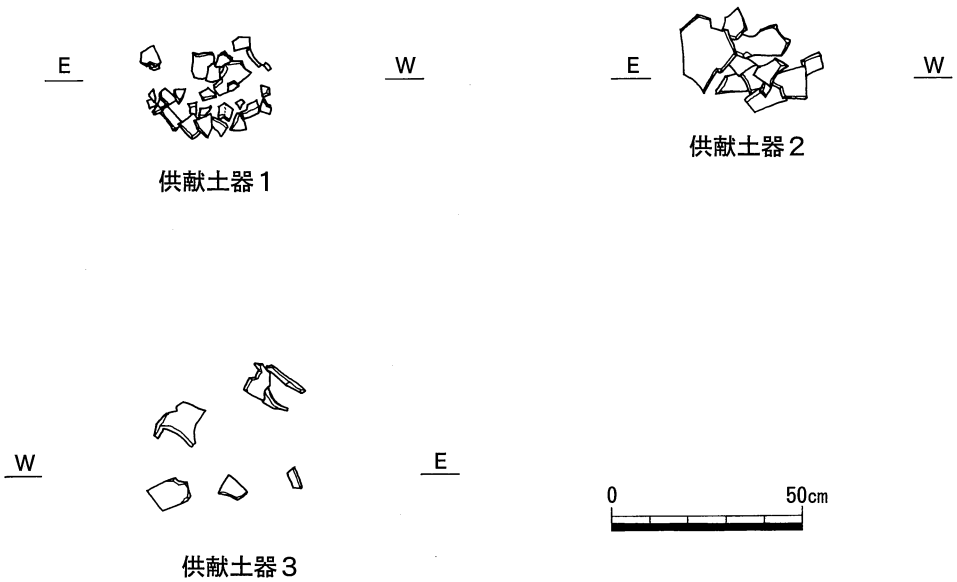


図９　15号墳 供献土器１・２・３平面図（S=1/20）

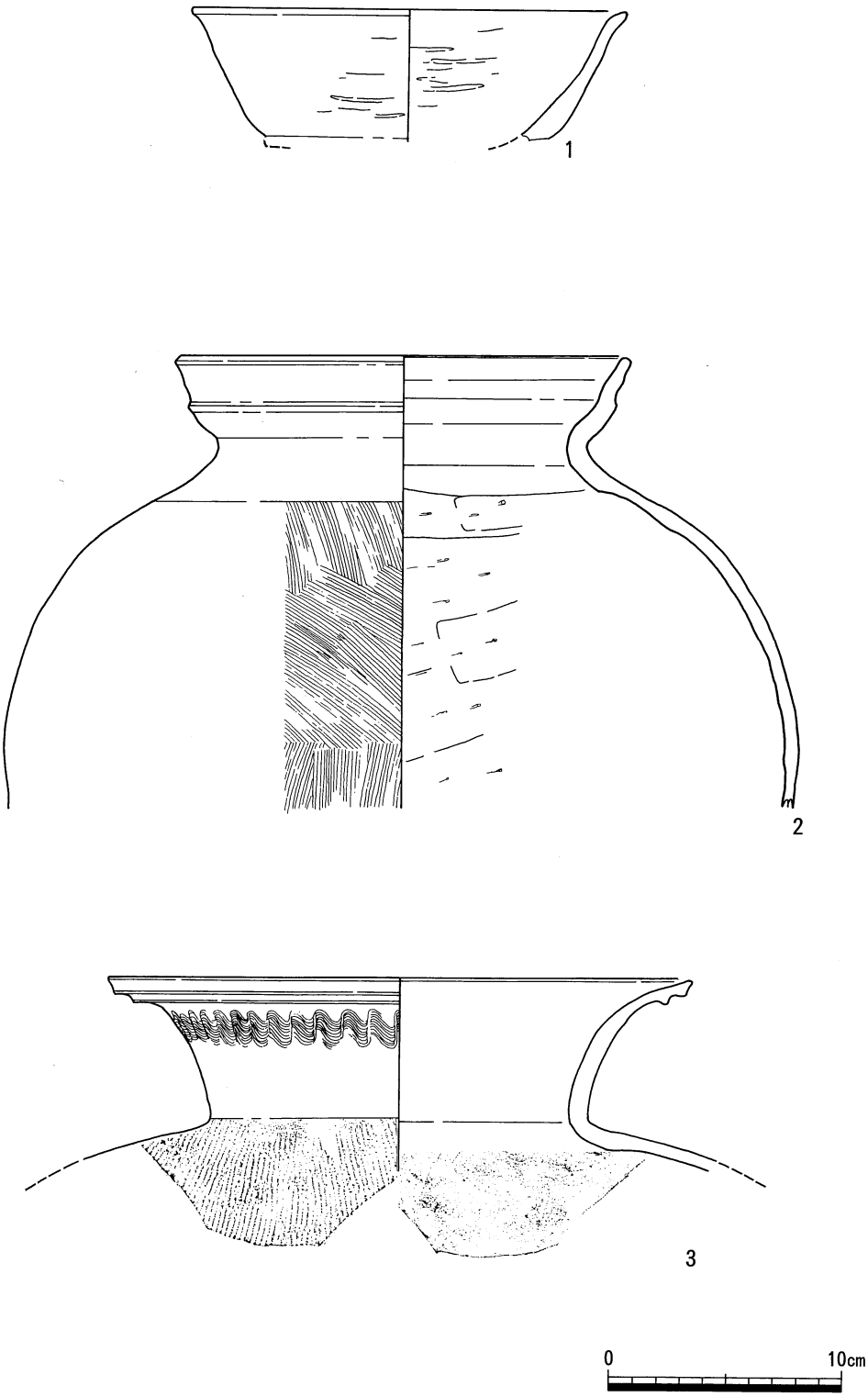


図10　15号墳・26号墳　出土遺物（S=1/3）

（2）南坂26号墳

古墳の構造（図6・7）

溝を挟んで、15号墳の西に隣接して築かれた、小規模な円墳である。墳丘西半はすでに崩落しているため、正確な規模は把握できないものの、現状で東西約５ｍ、南北約７ｍ、高さ約0.4ｍを測る。南北に長い低平な円墳である。15号墳と同様、墳丘に旧地表や盛土の痕跡がみられないため、地山削り出しによってつくられたものと判断する。また葺石は出土していない。

主体部（図11）

墳頂部の南よりに壊れた箱式石棺とみられる遺構を確認した。15号墳の主体部と同様、東西方向に長軸をとる。遺構の半分はすでに失われているので正確な規模は把握できないものの、現状で長さ約1.5ｍ、幅約１ｍの掘り方を持つ。断面を確認すると、西に向かって傾斜している。これは、後世に破壊を受けた際に石棺の板石共々掘り方の西半も失われたことによるものと推測される。遺構内から遺物は出土していない。

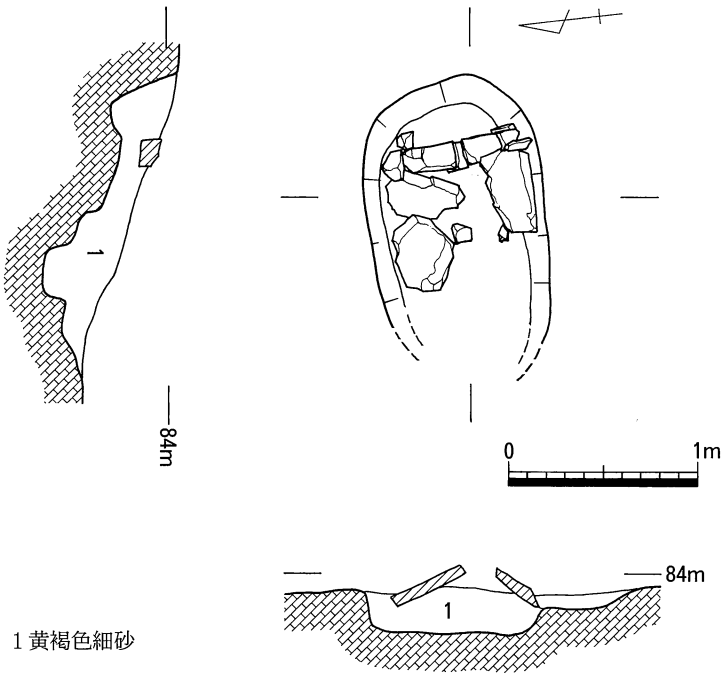


図11　26号墳 主体部 平・断面図（S=1/40）

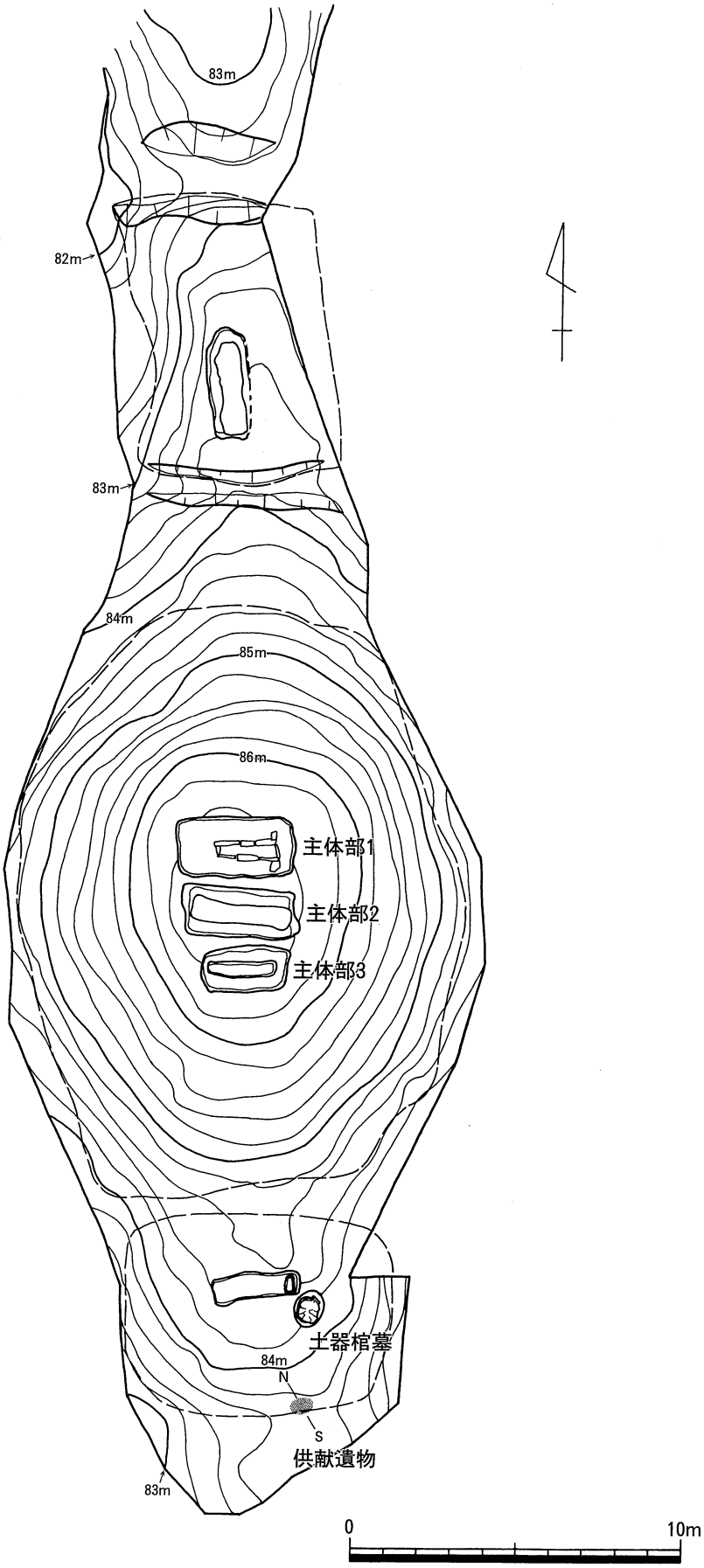


図12　16号墳・24号墳・25号墳 平面図（S=1/200）

2．南坂16号墳・24号墳・25号墳

（1）南坂16号墳

古墳の構造（図12）

標高約85mに位置する。東西約13m、南北約17m、高さ約2.2mを測る。南北に長い円墳である。今回調査した中で最大の規模である。断面観察から、墳丘に旧地表や盛土の痕跡は確認できないため、基本的に地山削り出しによって作られたものと判断する。ただし、主体部１の上面では、主体部を覆う盛土の痕跡を部分的に確認しているので（図13　２・３層）、墳丘上部は本来盛土を施されていた可能性が高い。主体部を葺石など明確な区画が存在しないため、平面形はどの部位を測定するかで若干の差異が生じる。北に位置する24号墳との境には区画溝が掘られているが、現状では削り出しの傾斜変換点を墳端としている。

墳頂部から未盗掘とみられる埋葬施設を３基確認した。北から順に主体部１・主体部２・主体部３とする。３基とも墓壙の規模は他の古墳よりはるかに大きく、同時期に築造されたと考えられる、南坂９号墳に次ぐ地位の古墳であると推測される。それぞれ非常に近接した位置に墓壙が掘り込まれているものの、切り合い関係はみられないため埋葬の順序は判然としない。主体部２が最も高所に位置し、かつ粘土被覆を伴う木棺墓という異質な埋葬形態から、本墳の中心となる被葬者であったと推測される。

いずれの主体部も東西方向に長軸をとる。埋葬頭位は主体部１が東頭位を示しており、主体部２・３も同様に東頭位であった可能性が高い。いずれの主体部からも副葬品は出土しなかった。また、墳丘のまわりに供献された土器等も確認できなかった。築造時期は、遺物が伴わないためはっきりしない。後述する24号墳内で確認された土器棺墓が本来16号墳に伴うものであると考えるのであれば、古墳時代前期にさかのぼる可能性がある。

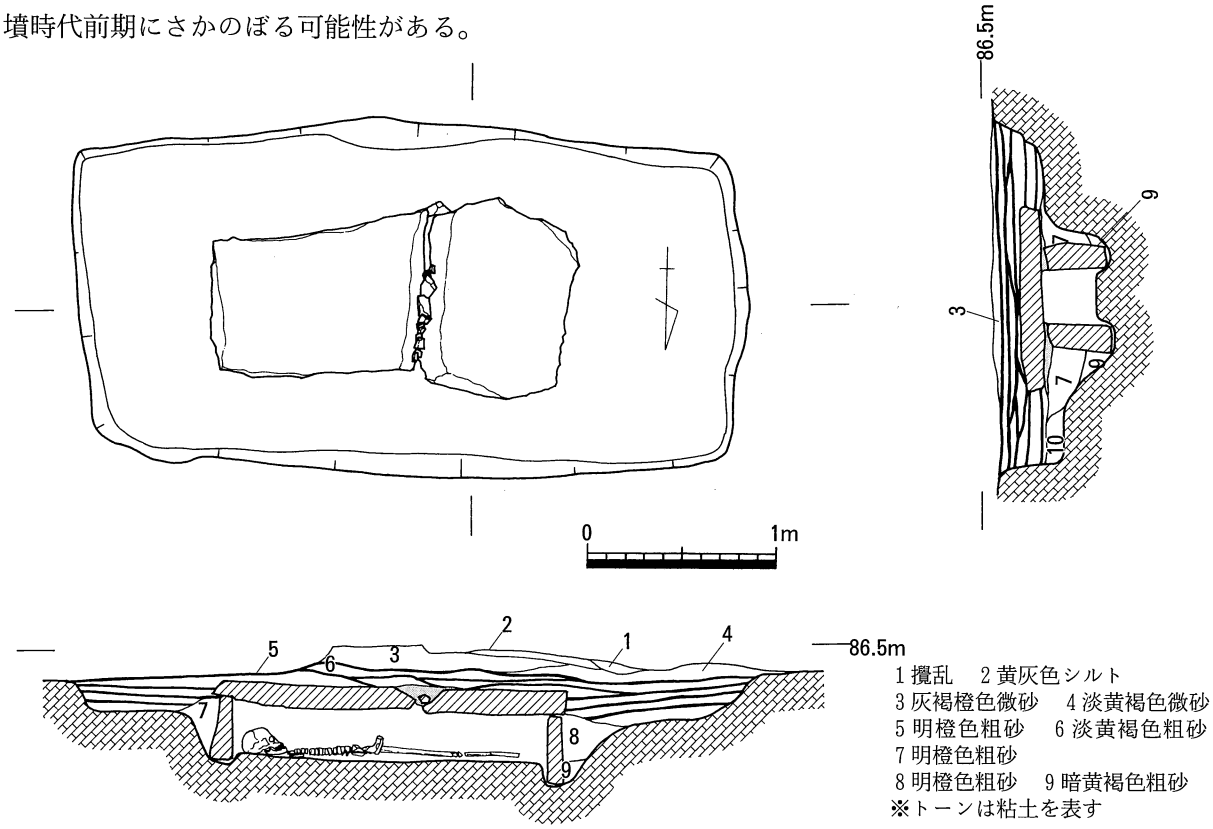


図13　南坂16号墳 主体部１ 平・断面図（S=1/40）

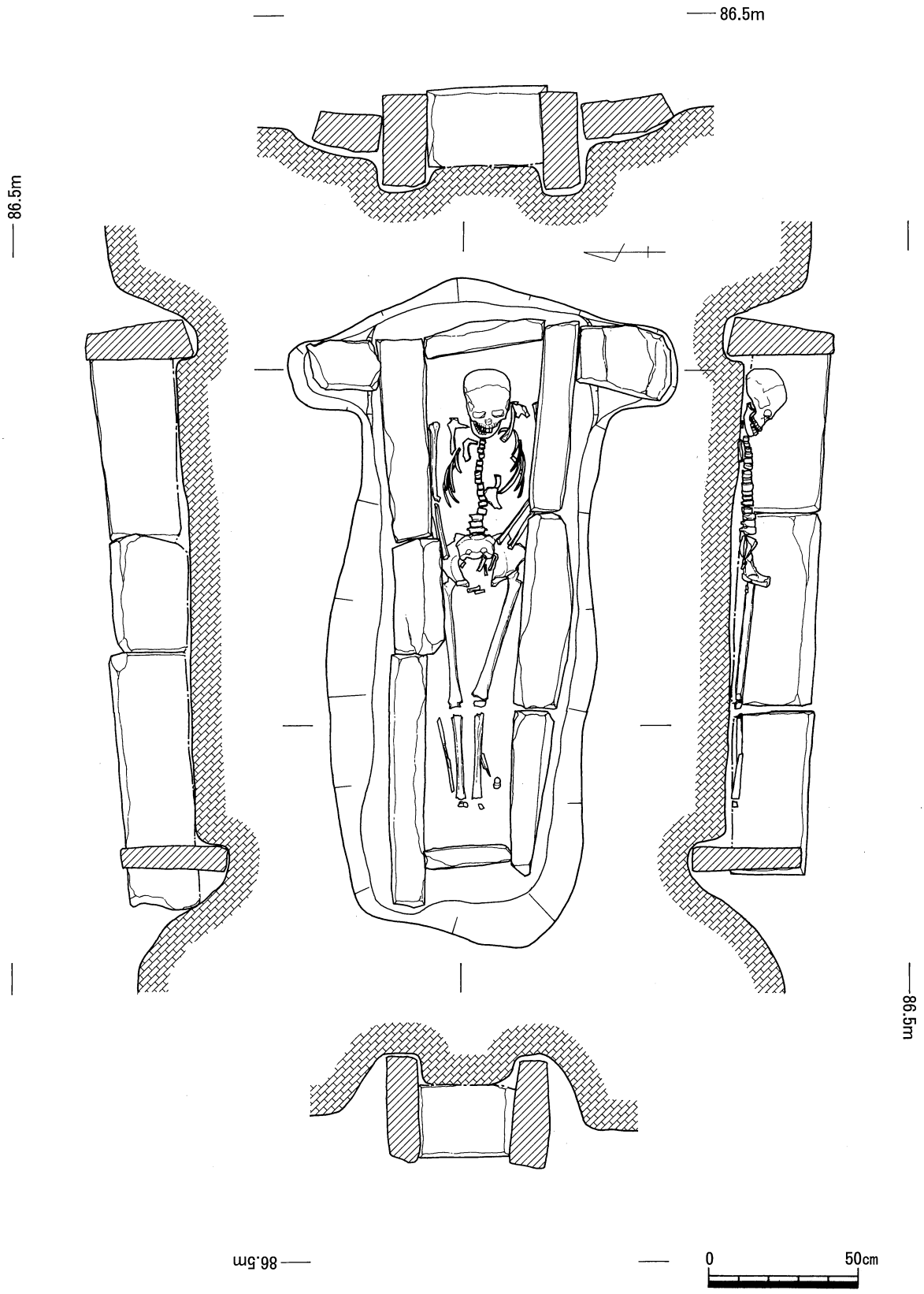


図14　南坂16号墳 主体部１ 遺物出土状況（S=1/20）

主体部１（図14）

16号墳の中で最も北に位置する埋葬施設である。箱式石棺で、規模は長さ２ｍ、幅0.5～0.7ｍを測る。石棺は板石を組んだ後、土砂の流入を防ぐために隙間に粘土を充填する。さらに頭部の側石には石棺の固定を強化するためか、外側から角礫で小口を挟み込んでいる。蓋石は１ｍ角の板石を２枚使用しており、ここでもまた石棺と板石の間に粘土を充填し、石棺内を外界と遮断している。側石の天端付近まで土を充填し、板石を置いた後、墓壙内に互層状に埋土を重ねて完成する（第５層・第６層）。このような丁寧かつ念入りに行われた封印の結果、石棺内からは頭蓋骨を赤色顔料（水銀朱）で真っ赤に染めた、保存状態の良好な人骨が１体、頭部を東に向けた状態で出土した。仰臥伸展葬による単葬である。10代後半の女性と考えられる。副葬品は出土していない。

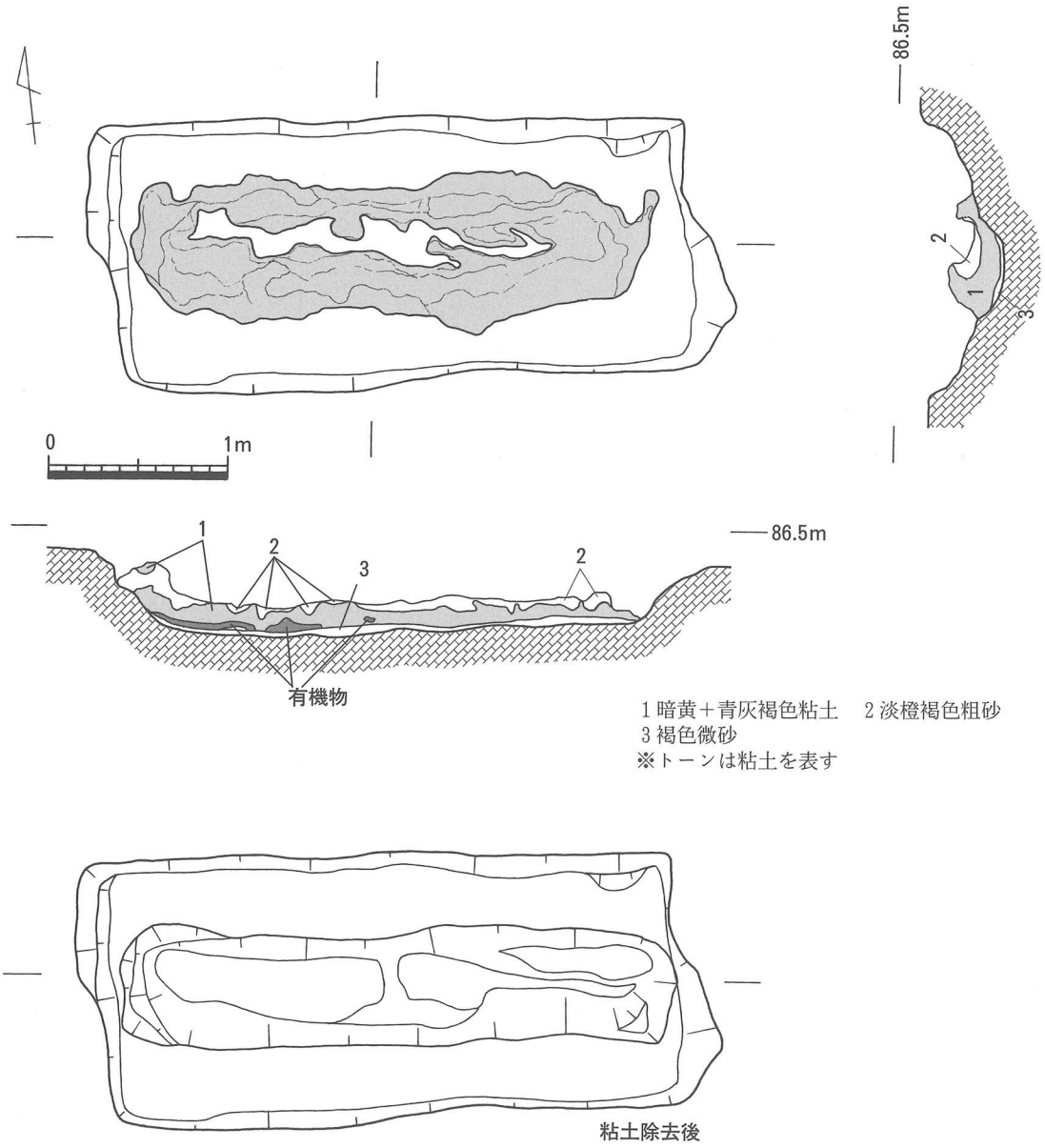


図15　16号墳 主体部２ 平・断面図（S=1/40）

主体部２（図15）

墳丘の中央に築かれた主体部である。発見当初は粘土郭と考えられたものの、中央部が落ち込み、底部に木棺に由来すると考えられる有機物が確認されたため、木棺の上半部を粘土で覆う構造の埋葬施設と判断した。粘土を除去した後に木棺を置くための掘り方を確認した。主体部の断面から判断して、棺型式は底板の横断面がＵ字状を呈するタイプ（福永1987）と考えられる。規模は長さ約3.0m、幅約 0.6mを測る。副葬品等は出土していない。同様の埋葬施設は後述する25号墳でも確認しており、16号墳と25号墳の強い関連が窺われる。

主体部３（図16）

墓壙の規模は、長さ約2.4m、幅約1.3mを測る。他の主体部と同様東西方向に長軸をとる。墓壙内に長さ約２m、幅約0.4mを測る掘り込みを確認した。この中に木棺を置いたと考えられる。棺型式は主体部２と同様に底板の横断面がＵ字状を呈するタイプ（福永1987）の可能性が考えられる。副葬品は出土していない。

出土遺物

主体部１の人骨を除いて副葬品等は出土していない。隣接する24号墳では、墳裾に供献された土器や鉄鎌が確認できる。これらが24号墳のみならず、16号墳を意識していた可能性は否定できないが、ここでは位置関係を考慮して24号墳に伴うものとして扱っている。

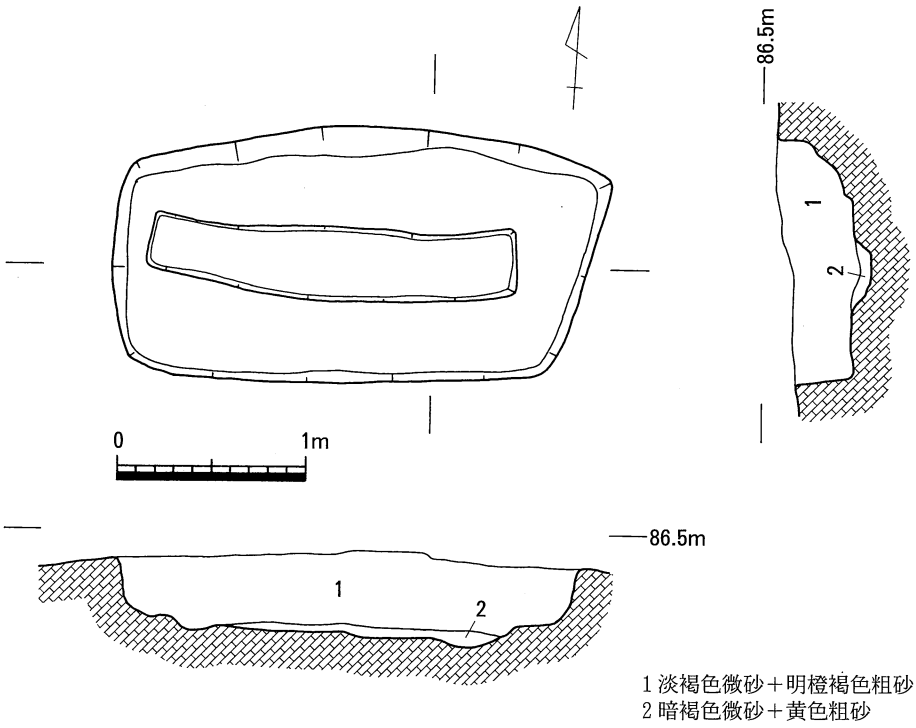


図16　南坂16号墳 主体部３ 平・断面図（S=1/40）

（2）南坂24号墳

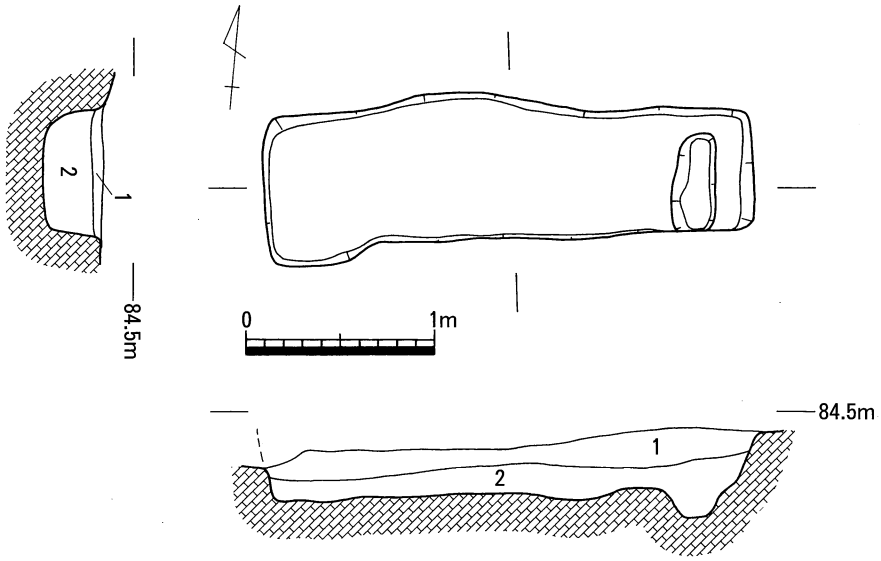
古墳の構造（図12）

16号墳の南に隣接する。東西５ｍ以上、南北７ｍを測る。地山削り出しの方墳である。16号墳との境に区画溝は設けていない。当初は16号墳と合わせて作り出し付円墳の可能性を意識したが、それぞれ別の古墳と判断した。主体部から副葬品は出土しなかったため、築造時期ははっきりしない。南の墳端付近から本墳に供献された可能性がある古墳時代中期の高杯や鉄鎌がまとまって出土した。

主体部に隣接した位置から土器棺墓が１基確認された。棺身に使用された壺形土器は古墳時代前期の所産と考えられる。24号墳の主体部と土器棺墓は切り合い関係をもっておらず、供献土器の時期を重視して24号墳が中期の所産と考えるのであれば、築造に際して土器棺墓を意識して築造されたという見方もできる。しかし、土器棺は古墳時代前期の所産と考えられるため、本墳の築造年代が土器棺墓の作られた時期までさかのぼる可能性は否定できない。

主体部（図17）

墳頂部に確認された埋葬施設は、長さ約３ｍ、幅約0.6ｍの木棺墓と考えられる。墓壙の規模は、15号墳と同じ規模で、16号墳ほど裏込めのスペースを確保していない。東側短辺部に溝状掘込みが確認できることから、棺型式はＩ型（福永1987）である可能性が高い。副葬品等は確認されていない。



１灰褐色粗砂＋淡黄褐色粗砂　２暗黄褐色粗砂

図17　南坂24号墳 主体部 平・断面図（Ｓ=1/40）

土器棺（図18・19）

24号墳の墳丘上で確認された。発見当初すでに上半部が大きく失われていた。残存する墓壙は長さ1.2m、幅0.8mである。土器は棺身に利用された１個体のみ出土し、棺蓋に使用された土器は確認できなかった。棺身に使用された壺形土器（図19）は、口径約49cm最大胴経約75cmの大型品である。口縁部には打ち欠いた痕跡はみられない。平底で焼成後穿孔が施される。古墳時代前期と考えられる。24号墳に供献されたと推測される土器と、土器棺との年代に開きがあるため、遺物の年代関係から推測すると、土器棺を意識して24号墳の埋葬施設が築造されたとは考えにくい。ただし、異なる時期の土器を棺に利用する例は当地域の長坂古墳群にもみられるため、埋葬の時期と土器棺の製作時期に差異が生じる可能性は考慮する余地がある（草原1999）。

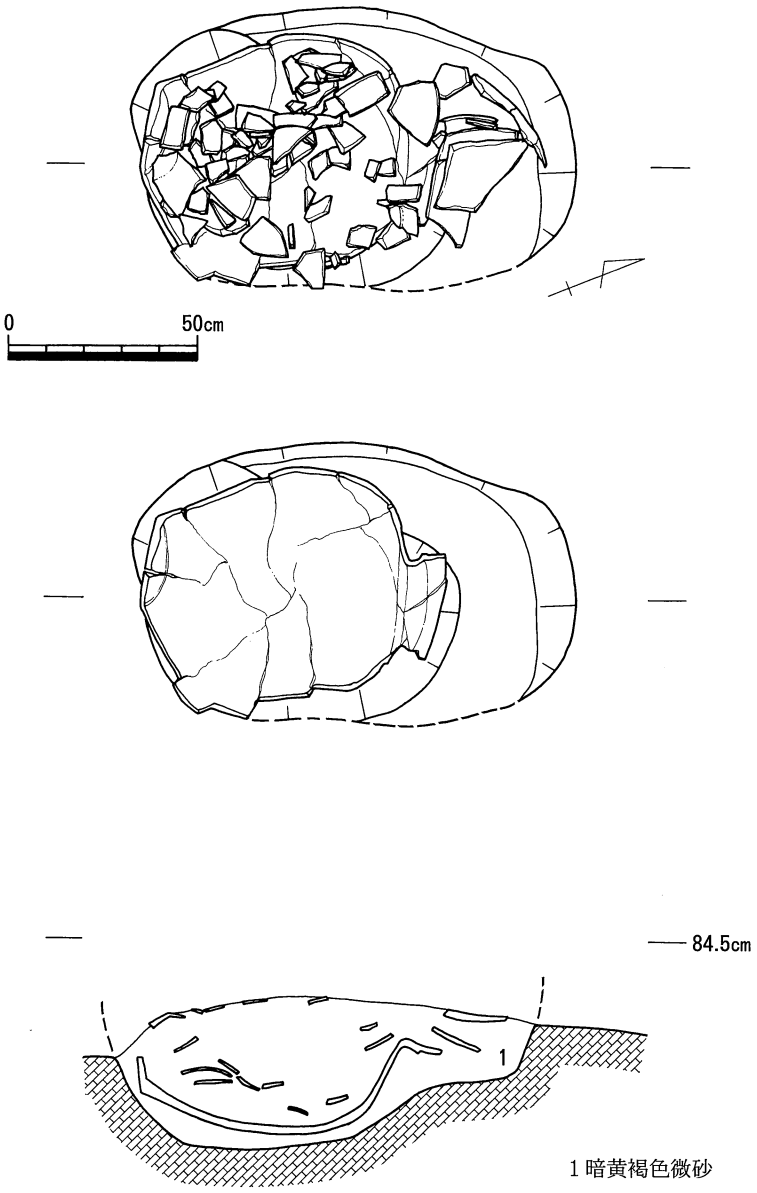


図18　南坂24号墳 土器棺墓出土状況（S=1/20）

出土遺物（図20～22）

供献土器（５・６・７）

高杯が３点出土している。墳端付近からまとまって出土した。出土状況から、24号墳の墓前祭祀に伴う供献土器と思われる。時期はいずれも古墳時代中期である。

鉄鎌（Ｍ１）

供献土器と共に出土した。先端を欠いているものの、鉄鎌のミニチュア製品と考えられる。所属時期は古墳時代中期と考えられる。

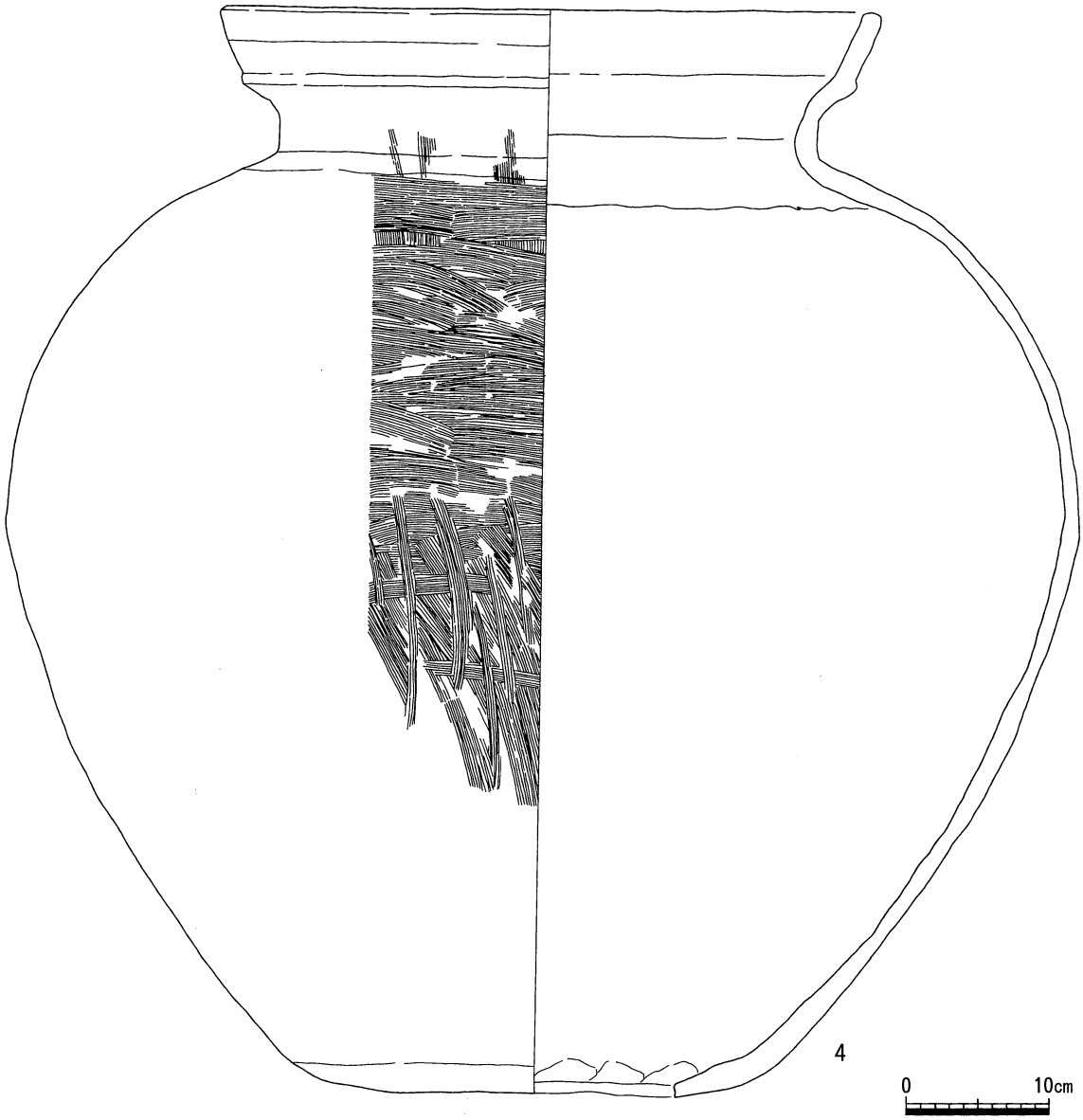


図19　土器棺実測図（Ｓ=1/5）

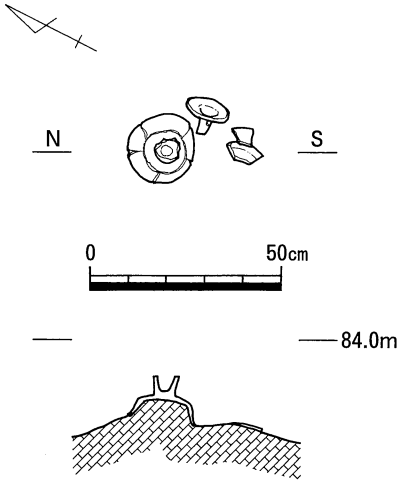


図20　24号墳　供献遺物出土状況（S=1/20）

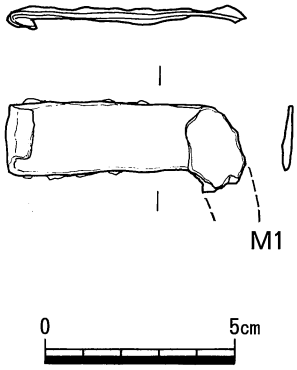


図21　鉄鎌実測図（S=1/2）

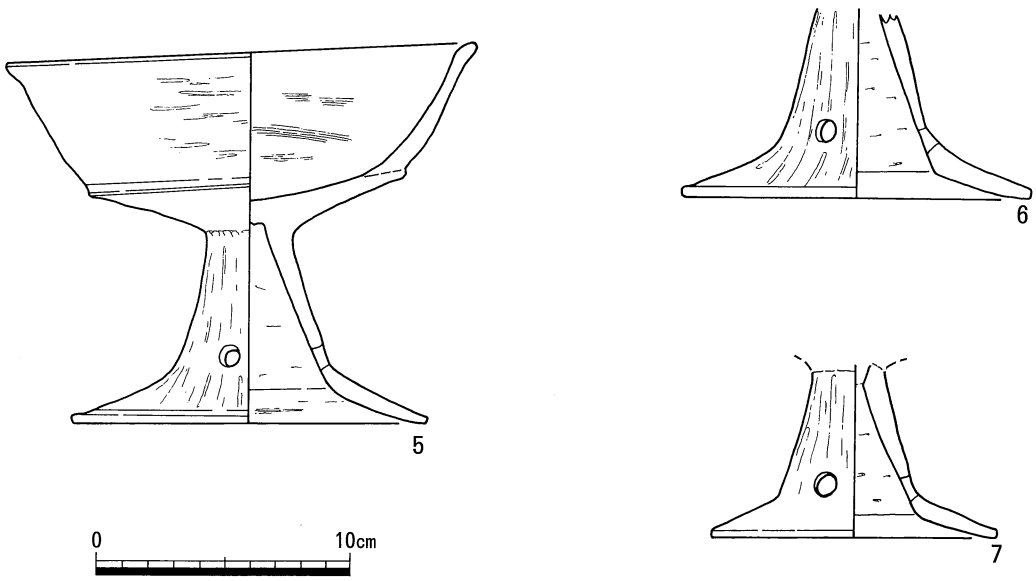


図22　高杯実測図（S=1/3）

（3）南坂25号墳

古墳の構造（図12）

16号墳の北に隣接する。東西５ｍ以上、南北７ｍを測る。地山削り出しの方墳である。16号墳との間に区画溝を設けており、16号墳を意識して築造されたものと推測される。主体部は16号墳の主体部２と同様、上半部を粘土で覆う方式を採用している。主体部の構造は16号墳を意識しているものの、本墳の主体部の長軸は、16号墳と異なり南北方向を採用する。

主体部（図23）

墳頂部で確認した埋葬施設は、上半部を粘土で被覆しており、内部に木棺が存在していたものとみられる。墓壙内で確認した掘り方の規模は、長さ約2.7m、幅約0.6mを測る。副葬品等は確認されていない。

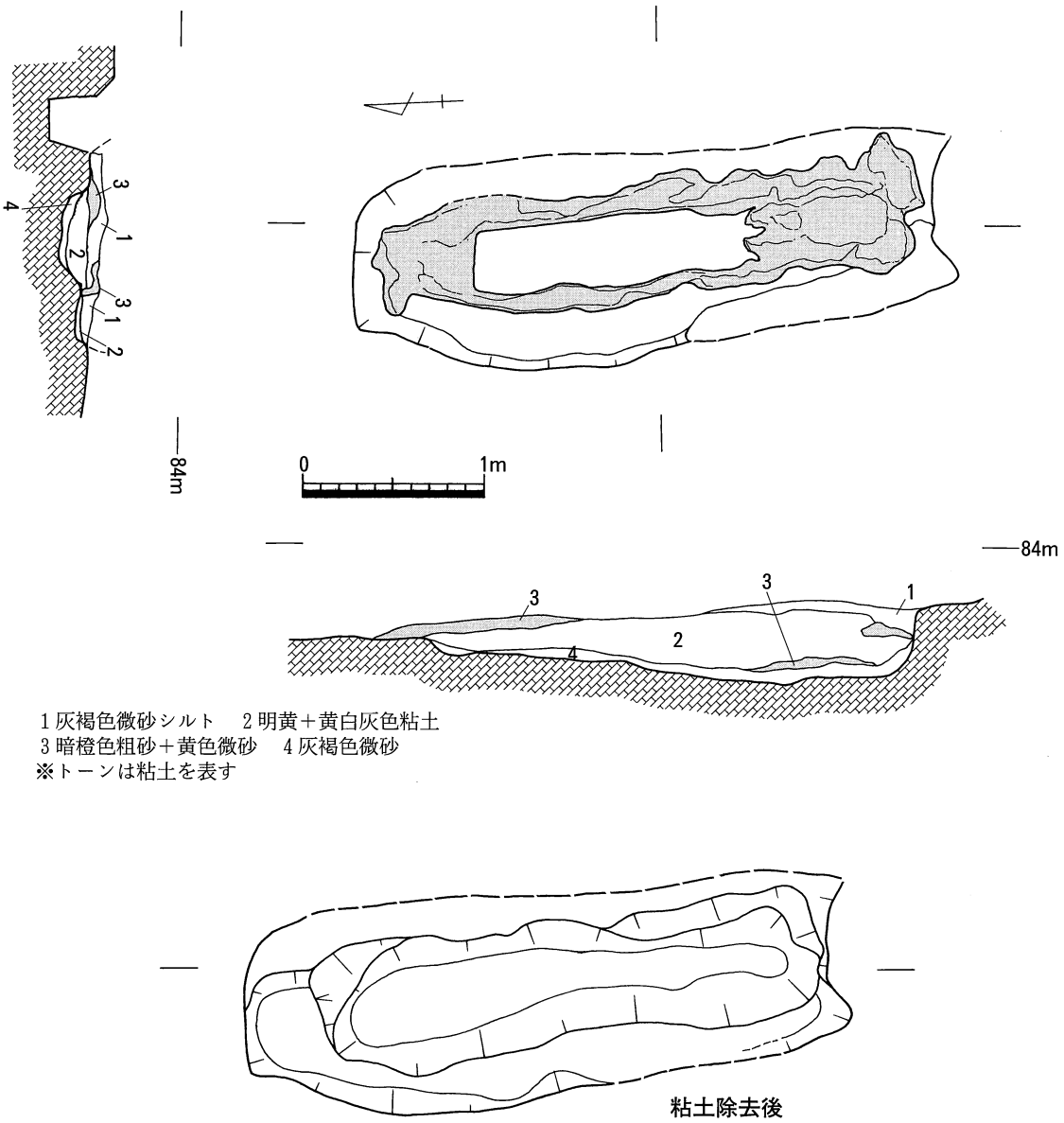


図23　25号墳 主体部 平・断面図（S=1/40）

３．南坂27号墳

古墳の構造（図24）

調査区の北端に位置する。東西約９ｍ、南北約6.4ｍを測る。地山削り出しの方墳である。他の古墳から直線距離で40ｍ弱離れ、比高差で約８ｍ低いところに形成されており、独立墳の様相を呈する。後述する主体部の構造からみても、他の古墳と異なる点が多く、別のグループに属する可能性は否定できない。今回発掘した古墳の中で、唯一副葬品が出土した古墳である。

主体部（図25・26）

墳頂部には長さ約２ｍ、幅約0.6～0.9ｍの箱式石棺が確認された。石棺は、サイズの揃わない板石を並べ、蓋石の上へさらに小角礫を積み上げて作られている。隙間に粘土を充填した痕跡は見られない。16号墳の主体部２と比べて粗い造りの埋葬施設である。赤色顔料の痕跡もみられなかった。石棺は側石が一部崩れ、外部から土が流入していたものの、頭位を東に向けた人骨１体と鉄剣が２本出土した。人骨は保存状態が16号墳主体部１より良くない。10代前半の男性の可能性がある。

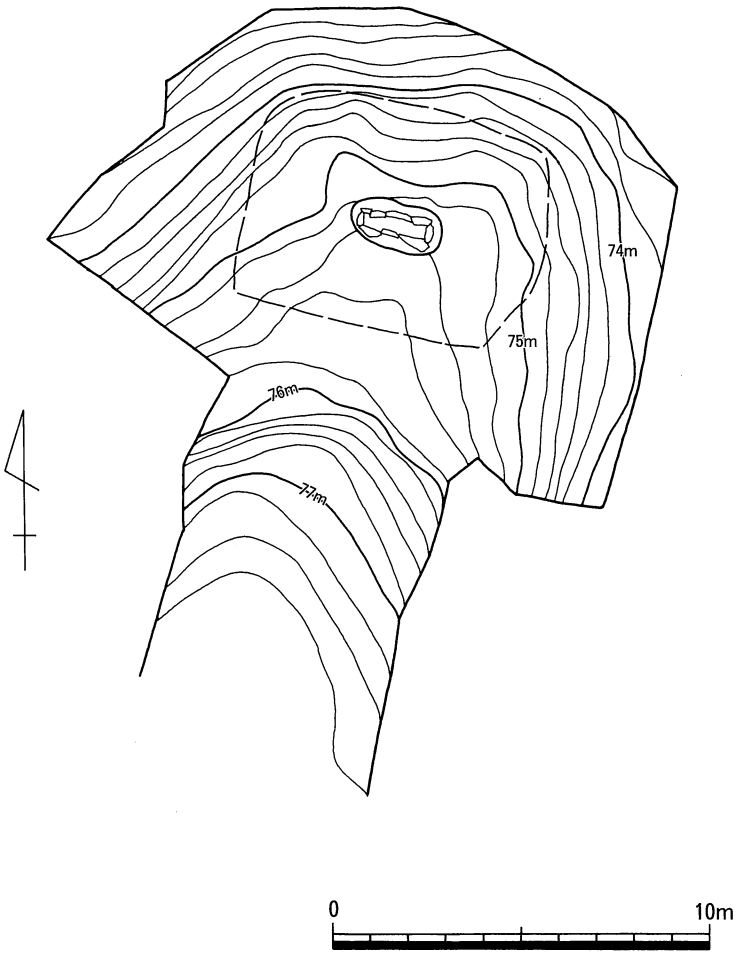
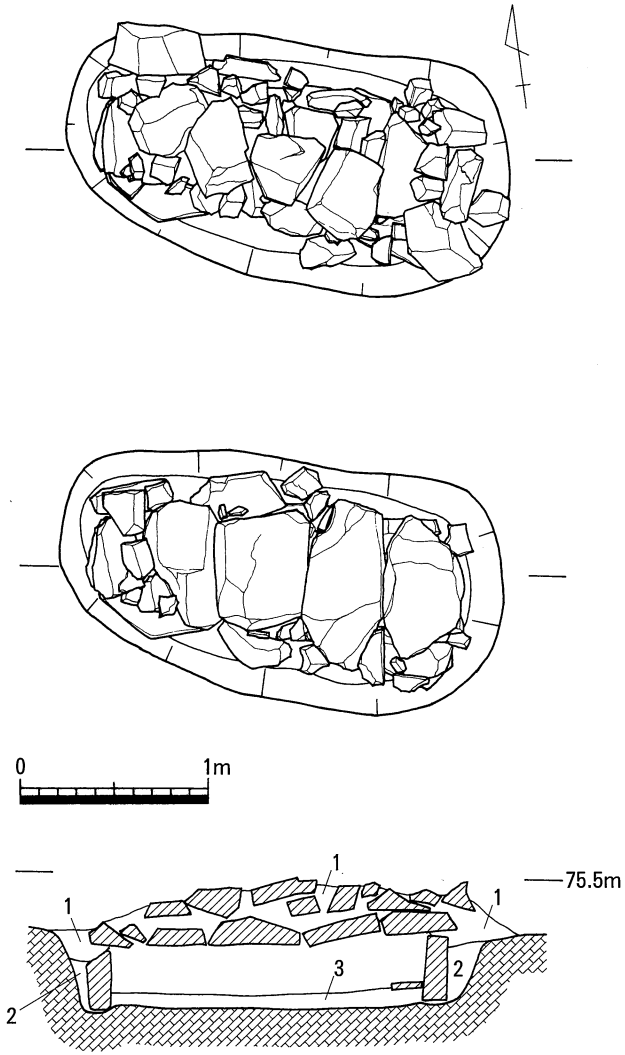


図24　27号墳 平面図（S=1/200）



1 淡黄褐色粗砂　2 明黄褐色粗砂　3 黄褐色粗砂

図25　27号墳　主体部　平・断面図（S=1/40）

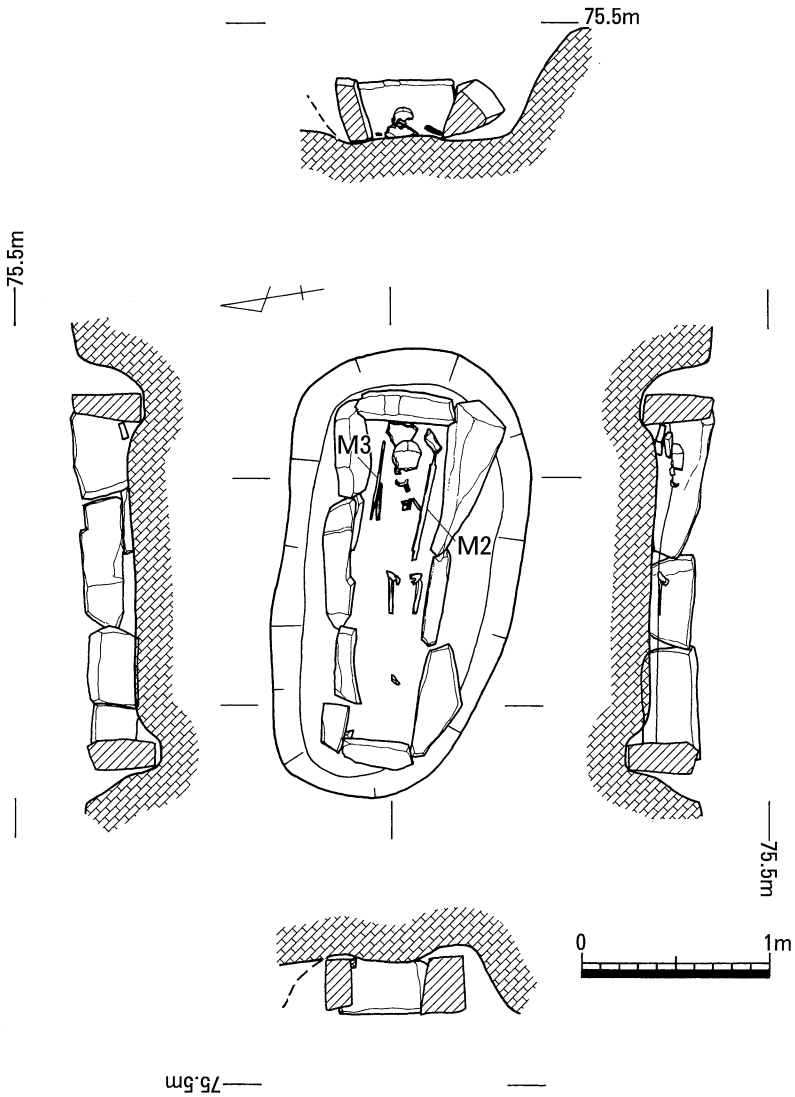


図26　27号墳　主体部　遺物出土状況（S=1/20）

出土遺物（図27）

鉄剣（M2・M3）

2本とも切っ先を足下へ向けた状態で出土した。M2は先端部をやや欠くもののほぼ完形に近い。茎部を含めた全長は475㎜で刃部長は410㎜、刃部幅28㎜を測る。M3は完形品で茎部を含めた全長は395㎜で、刃部長は310㎜、刃部幅26㎜である。M2は茎部の端付近に、M3は茎部の中心に目釘穴が確認できる。

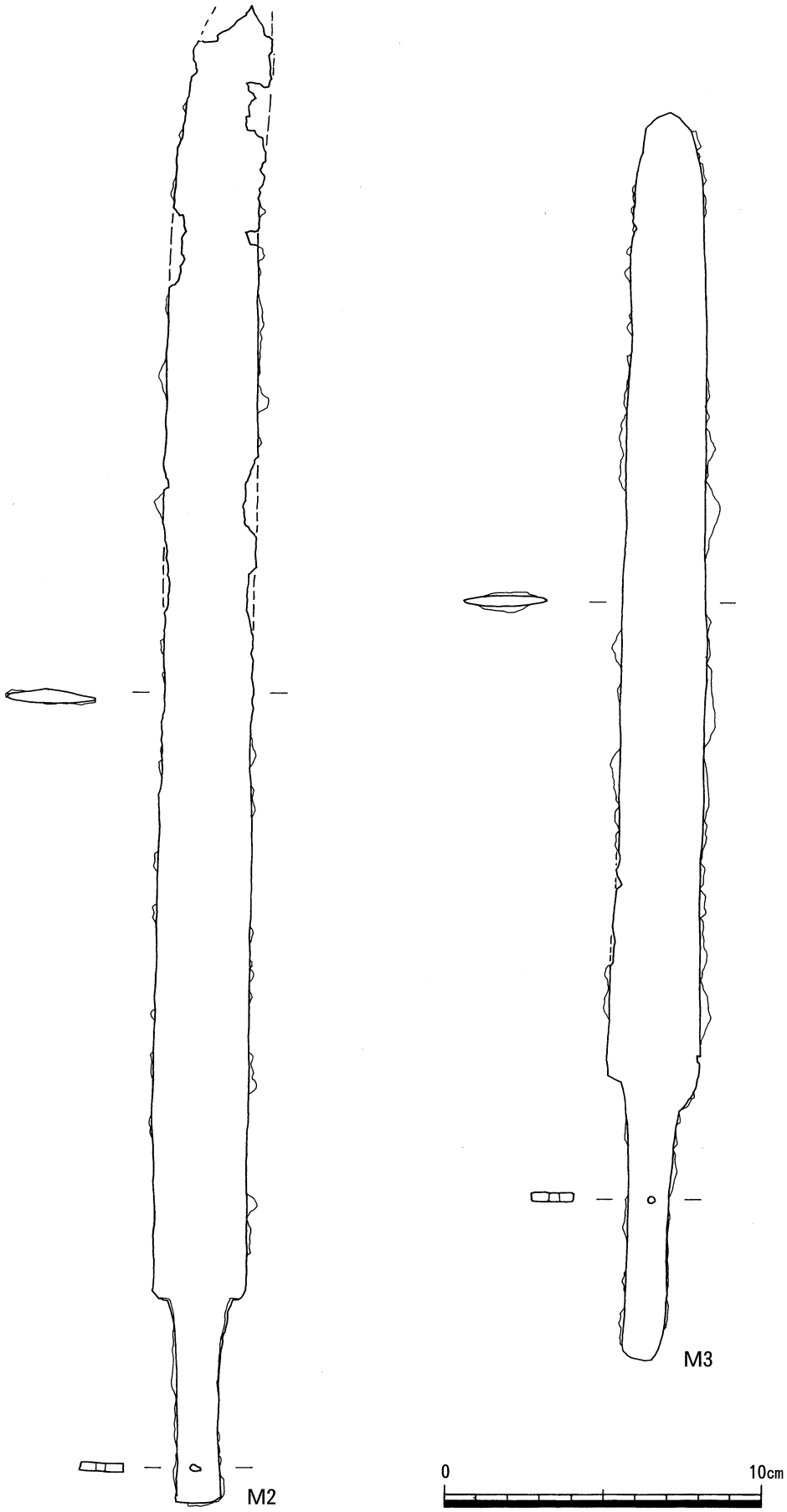


図27　27号墳出土遺物（S=1/2）

4．その他の遺物（図28）

表土剥ぎの際や流土中から、弥生時代・古墳時代の土器が少量ながら出土している。その一部は供献土器であった可能性がある。

8は弥生土器の甕の口縁部で時期は後期前半頃と考えられる。15号墳付近で採取された。9～12は土師器で、9・11はいわゆる「吉備型甕」と呼ばれる二重口縁甕の口縁部である。10は小型の甕である。9・11は15号墳と26号墳の間付近で採取され、10は15号墳周辺で採取された。時期は古墳時代前期とみられる。12は高杯の脚部で時期は古墳時代中期と考えられる。25号墳付近で表土剥ぎ中に採取されており、供献土器であった可能性がある。

参考文献

草原孝典編1999『長坂古墳群』岡山市教育委員会

福永伸哉1987「木棺墓」『弥生文化の研究　8．祭と墓と装い』　雄山閣

山本三郎1992「竪穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究　7．古墳Ⅰ　墳丘と内部構造』雄山閣

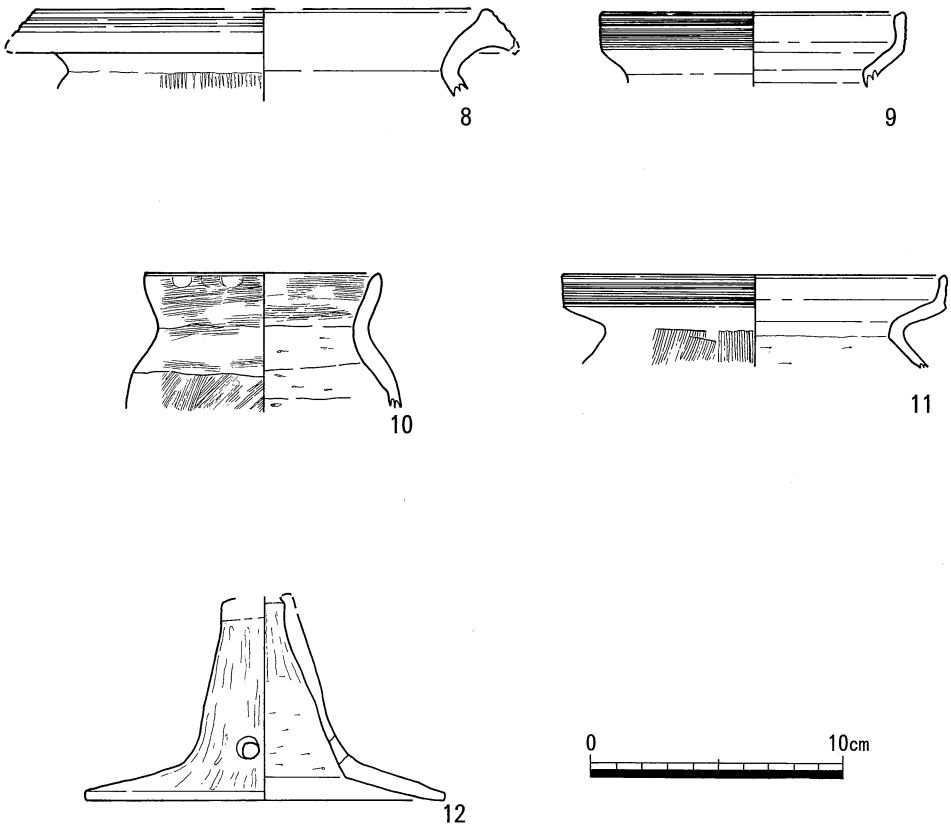


図28　その他の遺物（S=1/3）

第４章　まとめ

古墳群の築造年代

今回発掘した古墳群の中で、古墳の築造年代を直接示す遺物は確認できなかった。古墳はいずれも木棺あるいは石棺を埋葬主体としており、横穴式石室を主体部とするものはみられなかったため、古墳時代前期・中期の範疇に築造されたと考えられる。その時期幅の中で、手掛かりとなるのは15号墳・24号墳から出土した供献土器である。15号墳の供献土器の中には須恵器の甕が含まれており、この須恵器はＴＫ208型式と考えられる。共伴する土師器の高杯も同時期のものであり、古墳時代中期の始まりを５世紀初頭とするならば、15号墳の供献土器は中期中葉頃（５世紀中頃）であると推測される。その他に古墳群の年代を知る手掛かりとして、24号墳から出土した土器棺がある。出土した土器棺は類例が見当たらなかったものの、古墳時代前期の範疇と推測される。ただし、先述のとおり、土器棺の製作時期と埋葬の時期には時間差が生じる可能性がある。

また、各古墳の埋葬頭位は直行あるいは平行し、各々の埋葬を意識している。このことから、今回調査した古墳群は、それぞれ近接した時期に連続して形成されたものと理解しておきたい。

以上の点をふまえると、本古墳群の築造時期は古墳時代前期～中期の範疇で捉えられ、さらにそのなかでも比較的短期間に集中して築造されたものと考えられる。

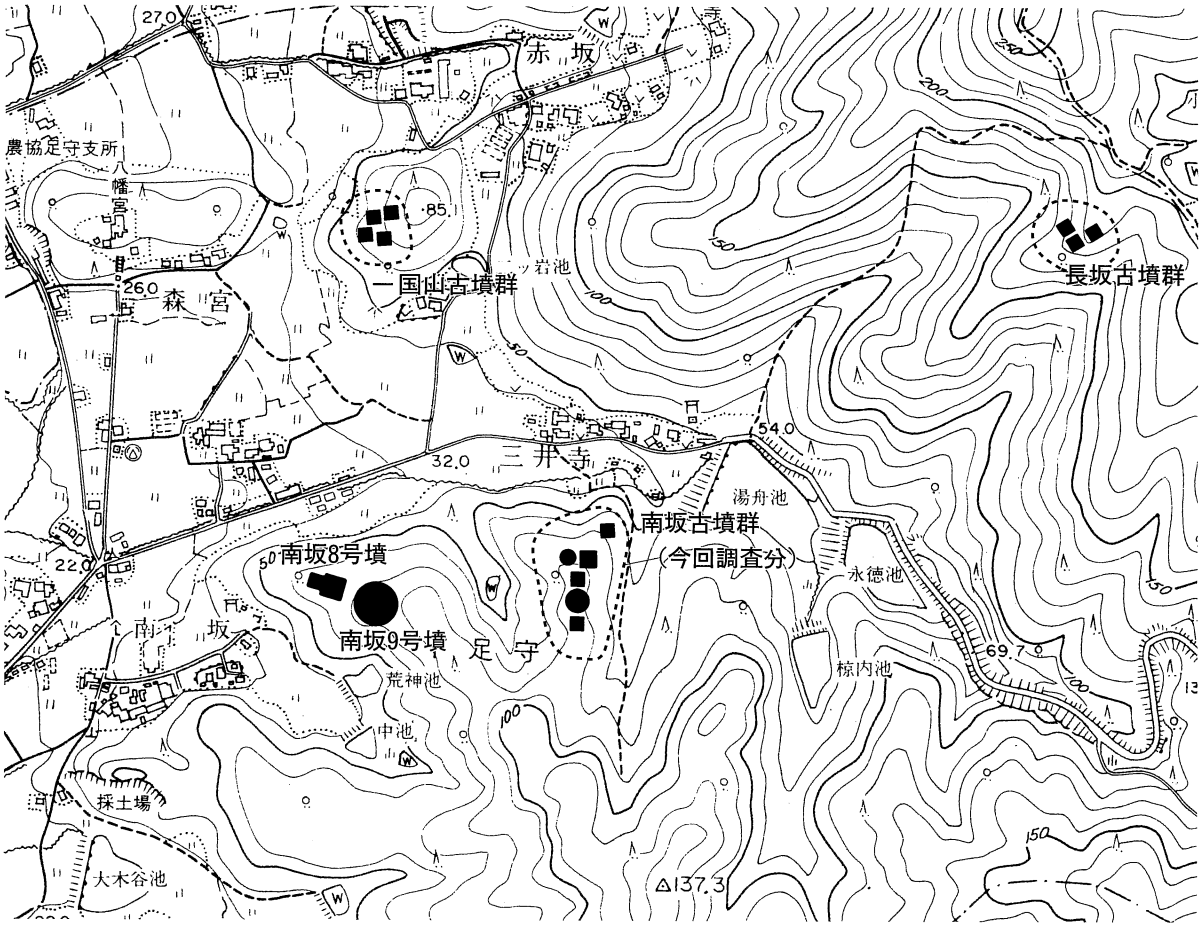


図29　下足守で発掘・測量された古墳分布図（Ｓ=1/10000）

南坂古墳群の特徴

足守地域では過去に長坂古墳群（草原1999）や一国山古墳群（河田2006）など、今回調査した南坂古墳群と同じく、古墳時代前・中期の古墳群の発掘調査が行われている。三井谷川を挟んで、北側に長坂古墳群・一国山古墳群が所在し、南側に南坂古墳群が展開する。今回調査した南坂古墳群では木棺直葬を主とすることが明らかとなった。一方長坂古墳群や一国山古墳群では、主体部に箱式石棺を採用しており、同時期・同地域の古墳群でありながら、埋葬施設に違いがみられる。このような違いがみられる背景について考える中で、南坂古墳群の特徴について触れてみたい。

長坂古墳群（表2）　方墳３基からなる古墳群である。１号墳は、３つの主体部を持ち、それぞれ箱式石棺・器台転用棺・土器棺で構成される。箱式石棺からは鉄剣が１本出土したほか、成人女性と推定される頭骨（ベンガラ付着）および、熟年男性と推定される全身人骨が確認された。この他、２号墳、４号墳ともに主体部を箱式石棺としており、墳丘の規模や形は南坂古墳群と類似し、副葬品も乏しい点は南坂古墳群と類似する。しかし、主体部に箱式石棺を採用する点に違いがみられる。

表１　南坂古墳群 埋葬施設一覧表

	墳形(規模)	埋 葬 施 設	出土遺物	備　考
15号墳	方墳(11×8m)	木棺	－	供献土器
16号墳	円墳(13×17m)	主体部１　箱式石棺	人骨	
		主体部２　木棺（粘土被覆）	－	
		主体部３　木棺	－	
24号墳	方墳(5×7m)	木棺	－	供献土器
		土器棺	－	
25号墳	方墳(5×7m)	木棺（粘土被覆）	－	
26号墳	円墳(5×7m)	木棺	－	
27号墳	方墳(9×6.4m)	箱式石棺	人骨・鉄剣２	枕石

表２　長坂古墳群 埋葬施設一覧表

	墳形(規模)	埋 葬 施 設	出土遺物	備　考
1号墳	方墳(7.1×4.8m)	箱式石棺	鉄剣１・人骨2	重葬
		器台転用棺		
		土器棺	人骨1	
2号墳	方墳(9.3×7.8m)	箱式石棺	－	
3号墳	方墳(一辺10m前後か)	箱式石棺（A埋葬）	－	
		箱式石棺（B埋葬）	－	

表３　一国山古墳群 埋葬施設一覧表

	墳形(規模)	埋 葬 施 設	出 土 遺 物	備　考
1号墳	方墳(9×7m)	箱式石棺1	鉄刀2・勾玉1・管玉5 ガラス小玉26	供献土器
		箱式石棺2	胡籙（鉄鏃含む）・鋤先	
3号墳	方墳(5.2×8m)	箱式石棺3	破鏡１・管玉2・石杵1・ 不明鉄器1	
4号墳	方墳(12×5m)	箱式石棺4	－	
		箱式石棺5	－	
		箱式石棺6	－	
5号墳	方墳(7×5m)	箱式石棺7	ヤリガンナ1	
		箱式石棺8	－	

一国山古墳群（表3）　前・中期の古墳は4基の方墳で構成される。このほか8世紀代の築造と考えられるもの（2号墳）は時期が大きく異なるため検討から除外した。長坂古墳群と同様、墳形は方墳で、規模は10mを大きく越えない小規模な古墳で構成される。主体部はすべて箱式石棺で、箱式石棺2を除いて、いずれも未盗掘であったと考えられる。人骨は出土しなかったものの、1号墳・3号墳から比較的まとまって副葬品が出土している。

まとめ

本稿で比較した3古墳群では、方墳を主とする墳形を採用する点は共通するものの、主体部は、南坂古墳群では木棺直葬を基本としているのに対して、長坂古墳群・一国山古墳群では箱式石棺が埋葬施設として採用されていることを指摘できる。墳形や副葬品の乏しさなどは各古墳群とも共通するものの、三井谷を境にして埋葬施設に大きな違いがみられる点は注目される。

埋葬頭位は、南坂古墳群が東・北頭位を意識しているのに対し、長坂古墳群では尾根に直行する東頭位を採用し、一国山古墳群では1号墳は尾根に直行する南頭位を意識しており、3・4・5号墳では尾根に平行する北東頭位を採用している。当地域の小古墳における埋葬頭位について研究がなされており、それらによると、東頭位を基本とすることが指摘されている（宇垣2001・草原1999）。今回調査した南坂古墳群では、24号墳の土器棺と25号墳を除き、他は東頭位であったと考えられる。これまで指摘されている小規模古墳における埋葬頭位に関して、南坂古墳群についても東頭位が優勢であったことを確認でき、頭位に関しても三古墳群は共通する。

以上、長坂古墳群・一国山古墳群・南坂古墳群の、墳丘規模・埋葬施設・副葬品・埋葬頭位について、簡単ではあるが比較してみた。南坂古墳群の小規模古墳における特徴として、木棺を埋葬施設に採用する傾向が強いことが指摘できる。小規模古墳において木棺を採用すること自体は珍しいものではないが、足守地域に展開する各古墳群において木棺を採用する意味について追求することが、当地域の古墳時代を研究する上で今後の課題の一つといえるだろう。

南坂古墳群についてはこれまで発掘調査や墳丘測量がすすめられており、古墳の築成状況や変遷が明らかになりつつある。しかし、検討の中心となったのは当地域の首長墳とみられる、全長20m以上の古墳であり、より小規模な古墳の実態は不明であった。今回の発掘調査によって、これら小規模古墳の内容についてわずかながら具体的に明らかにできた。今回の発掘調査が当地域の古墳時代研究の一助となれば幸いである。

参考文献

宇垣匡雅2001「吉備南部における古墳時代前半期小墳の埋葬頭位」『古代吉備』第23集
河田健司編2006『南坂8号墳・一国山城跡・一国山古墳群』岡山市教育委員会
草原孝典1999『長坂古墳群』岡山市教育委員会
草原孝典2000「吉備地方の古墳群－前・中期を中心に－」『季刊考古学』第71号　雄山閣

付載

南坂16号墳出土赤色物について

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

南坂16号墳の主体部1および２には赤色物が残存していた。特に主体部1では頭蓋骨が赤色物で染まった状態で出土した。この赤色物の材質を知るために蛍光Ｘ線分析とＸ線回折による分析を実施した。

蛍光Ｘ線分析

測定装置は、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置(セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L)を使用し測定した。分析の結果、第1表に示したように主体部1出土の赤色物(写真1)からは、水銀が検出され、その他含有物としては、珪素、アルミニウム、鉄等が検出された。また主体部2の床面土壌(写真2)からは、土壌成分である珪素アルミニウム、鉄、カリウム、チタン、カルシウム等が検出された。

Ｘ線回折分析

Ｘ線回折法では、赤色物の鉱物成分について調べた。その結果、16号墳主体部1出土の赤色物には、第1図Ｘ線回折分析チャートに示しているように、辰砂(HgS)のピークが観察された。なおこれ以外の鉱物は検出されなかった。また第2図のＸ線回折分析チャートは、主体部2で採取した土壌である。この図から石英、斜長石、雲母のピークのみが観察された。

まとめ

以上の分析結果から主体部1の赤色物は辰砂と同定され朱である。主体部2の赤色物に関しては、赤色顔料の成分である辰砂や赤鉄鉱などは検出されなかった。従って主体部2の床面で採取された試料は、赤色顔料ではないことが想定される。

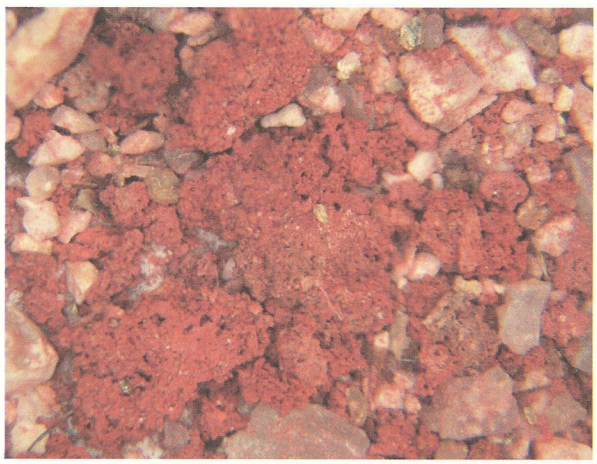


写真１　主体部１出土赤色物

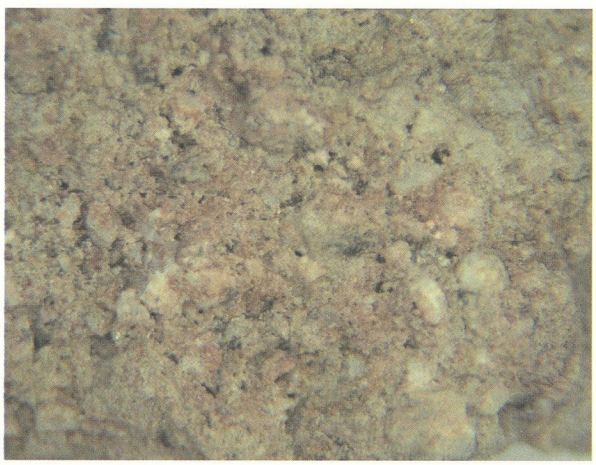
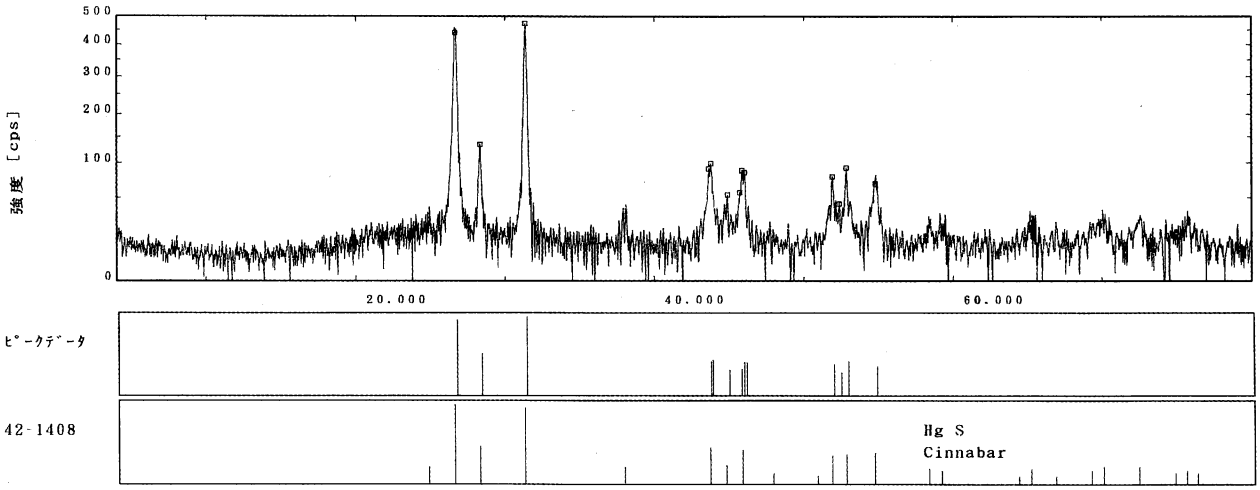


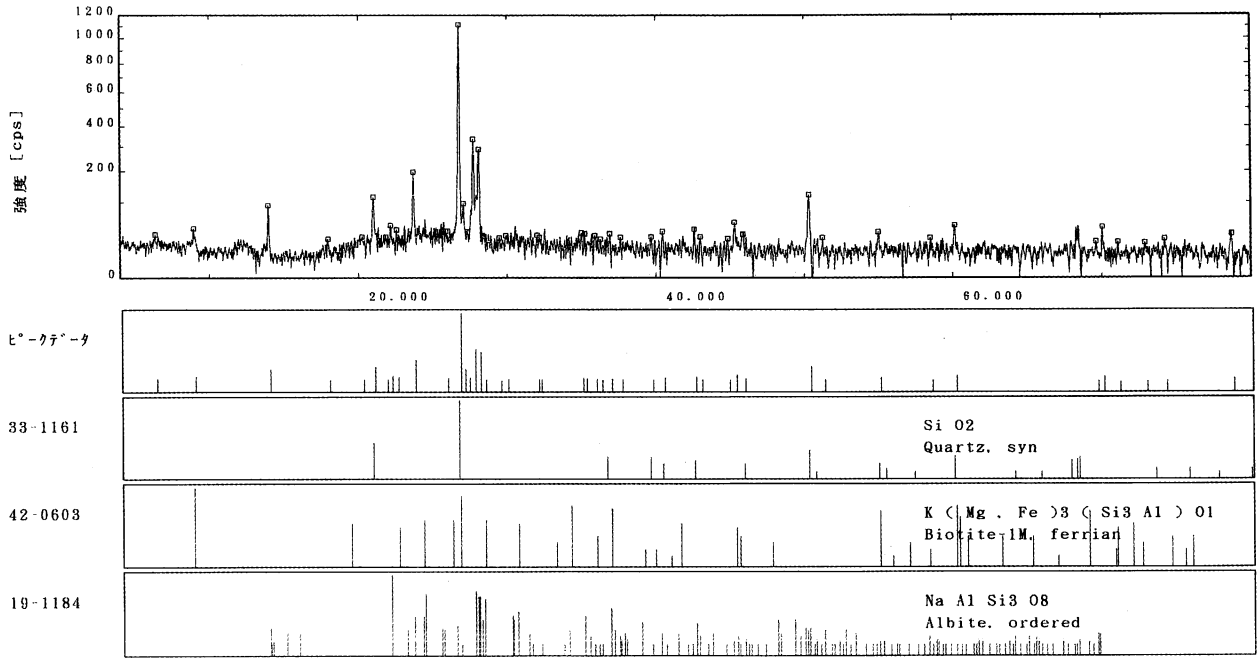
写真２　主体部２出土赤色物

第１表　南坂16号墳出土赤色物の分析一覧表（単位：%）

試料番号	出土遺構	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Hg
1	主体部１	58.27	0.00	14.35	1.45	0.00	2.83	0.36	1.22	0.31	0	20.29
2	主体部２	67.03	0.53	18.49	5.98	0.06	1.38	1.18	2.48	2.44	0.22	0



第１図　主体部１出土赤色物のＸ線回析分析チャート



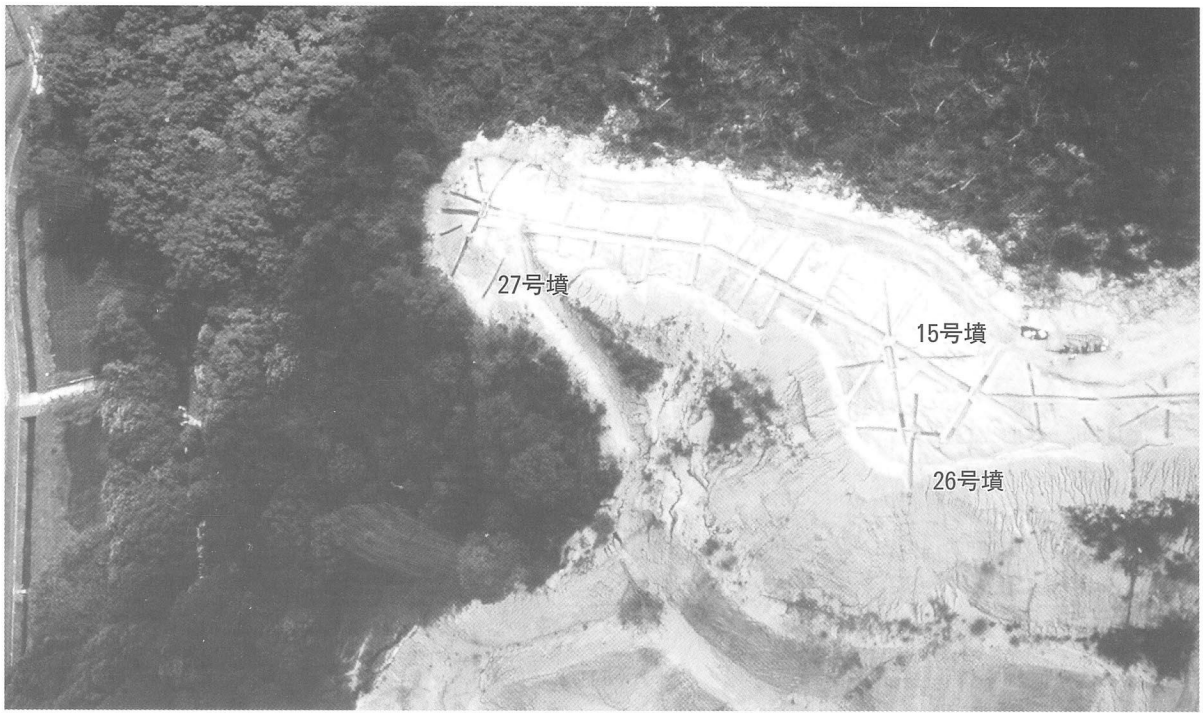
第２図　主体部２出土赤色物のＸ線回析分析チャート

表４　南坂古墳群 出土鉄器一覧表

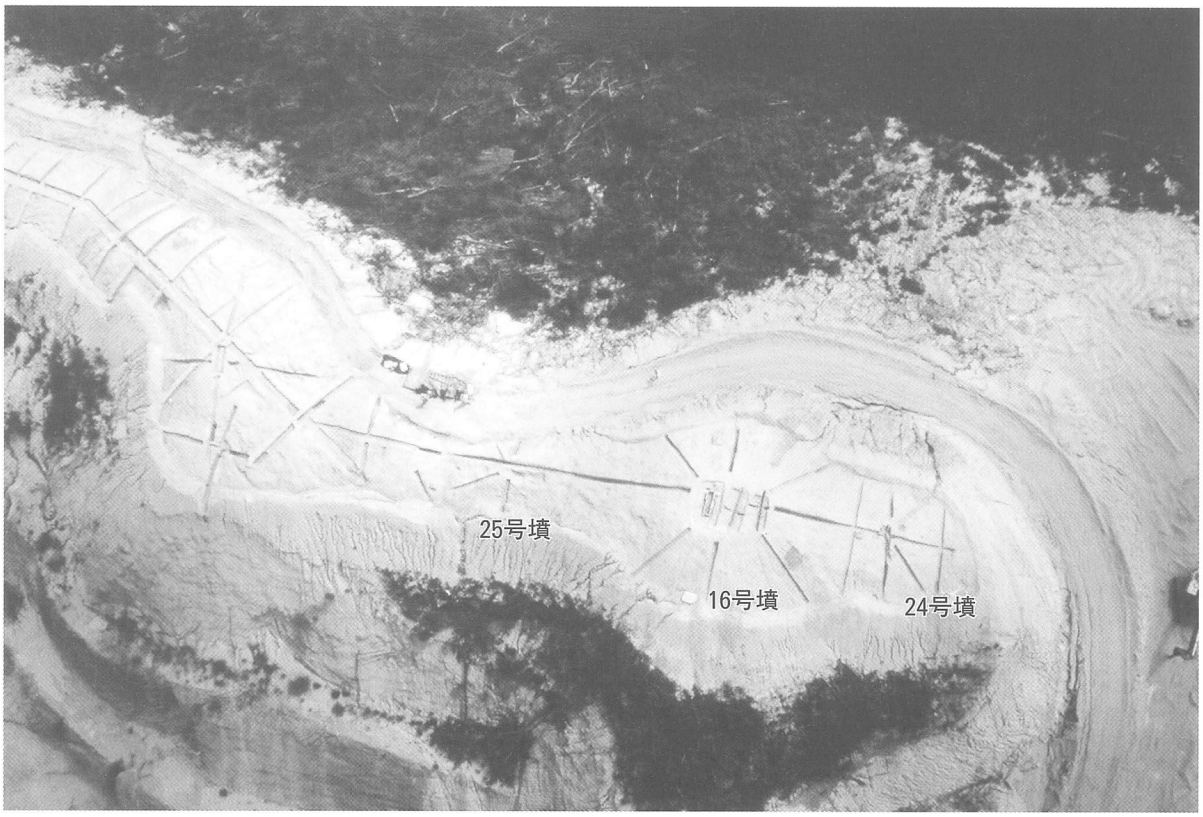
掲載番号	出土遺構名	器　種	計　測　値（mm）			備　考
			最大長	最大幅	最大厚	
Ｍ１	24号墳	鉄鎌	63	24	2	
Ｍ２	27号墳	鉄剣	476	刃部:28 茎部:13	刃部: 4 茎部: 3	目釘穴あり
Ｍ３	27号墳	鉄剣	395	刃部:26 茎部:13	刃部: 4 茎部: 3	目釘穴あり

表５　南坂古墳群 出土土器一覧表

掲載番号	出土場所	種別	器種	法　量（cm）	色　調	胎　土	焼成	調 整 ・ 特 徴
1	15号墳	土師器	高杯	口径：18.4 残存高：5.6	外面：鈍い黄橙色 内面：鈍い黄橙色	0.5mmの長石・石英・金雲母含む	良好	内外面ヨコナデ
2	15号墳・26号墳	土師器	甕	口径：19.0 最大胴径：34.0 残存高：19.5	外面：鈍い橙色 内面：黄橙色	0.5～３mmの長石・石英多く含む	良好	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ハケ、内面ヘラケズリ
3	15号墳・26号墳	須恵器	甕	口径：14.9 残存高：8.3	外面：灰白色 内面：灰色	0.5mmの長石含む	良好	内外面ヨコナデ
4	24号墳	土器棺	壺	口径：44.8 最大胴径：74.5 底径：33.4 器高：75.9	内外面：鈍い黄橙色	0.5～1mm程度の長石・石英含む	良好	内外面ハケメ、底部に焼成後穿孔
5	24号墳	土師器	高杯	口径：18.3 脚径：14.0 器高：15.0	外面：鈍い黄橙色 内面：鈍い黄橙色	0.5mmの長石・石英・金雲母多く含む	良好	杯部内外面ヨコナデ 脚部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
6	24号墳	土師器	高杯	脚径：13.7 残存高：7.5	外面：浅黄橙色 内面：鈍い黄橙色	0.5～1mmの長石・石英・金雲母多く含む	良好	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
7	24号墳	土師器	高杯	脚径：11.2 残存高：6.8	外面：浅黄橙色 内面：鈍い黄橙色	0.5～2mmの長石・石英多く含む	良好	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ
8	15号墳(表採)	弥生土器	甕	口径：17.7 残存高：3.4	外面：鈍い黄橙色 内面：黄橙色	0.5mmの長石・石英・金雲母含む	良好	内外面ヨコナデ
9	15号墳(表採)	土師器	甕	口径：11.8 残存高：2.4	外面：浅黄橙色 内面：鈍い黄橙色	0.5の長石・金雲母含む	良好	内外面ヨコナデ
10	15号墳(表採)	土師器	甕	口径：9.1 最大胴径：10.8 存高：5.4	外面：鈍い橙色 内面：鈍い褐色	0.5～2mmの長石・石英多く含む。金雲母含む	良好	外面ハケメ・ナデ口縁部ユビオサエ、内面口縁部ハケメ・ナデ、胴部ヘラケズリ
11	15号墳(表採)	土師器	甕	口径：14.9 残存高：3.6	外面：鈍い黄橙色 内面：鈍い黄橙色	0.5～1mmの長石・石英含む	良好	外面ハケメ、ヨコナデ、内面ヘラケズリ
12	25号墳(表採)	土師器	高杯	脚径：14.3 残存高：8.1	外面：鈍い橙色 内面：橙色	0.5～1mmの長石・石英含む。1～1.5mmの金雲母多く含む	良好	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ



1. 調査区北半（堀家純一氏撮影）



2. 調査区南半（堀家純一氏撮影）

図版２

15号墳・26号墳

1. 15号墳 主体部（西から）

2. 26号墳　主体部（南西から）

16号墳・24号墳

1. 16号墳・24号墳全景（堀家純一氏撮影）

2. 16号墳 主体部２ 検出状況（東から）

3. 16号墳 主体部２ 粘土除去後（東から）

図版４

16号墳　主体部１

1. 石棺検出状況
（北西から）

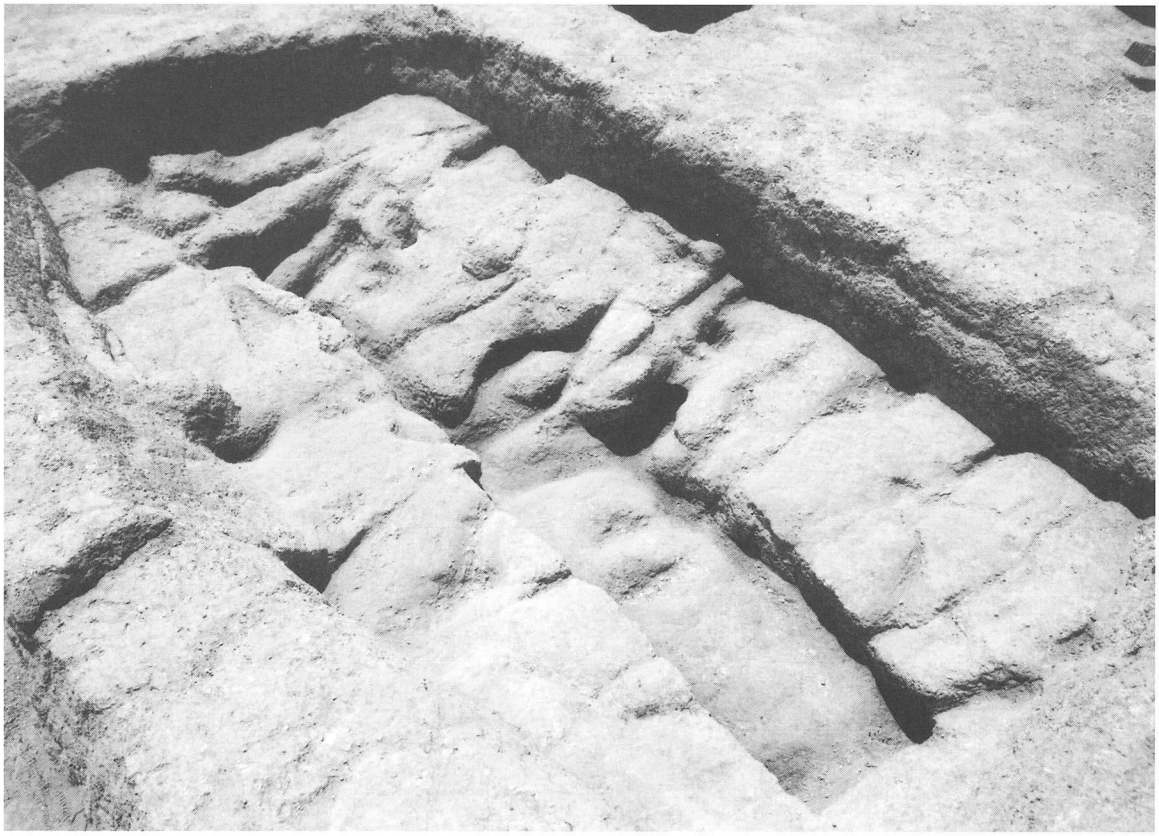
2. 埋土断面
（東から）

3. 人骨確認状況

16号墳

1. 主体部１　蓋石除去直後

2. 主体部１　拡大

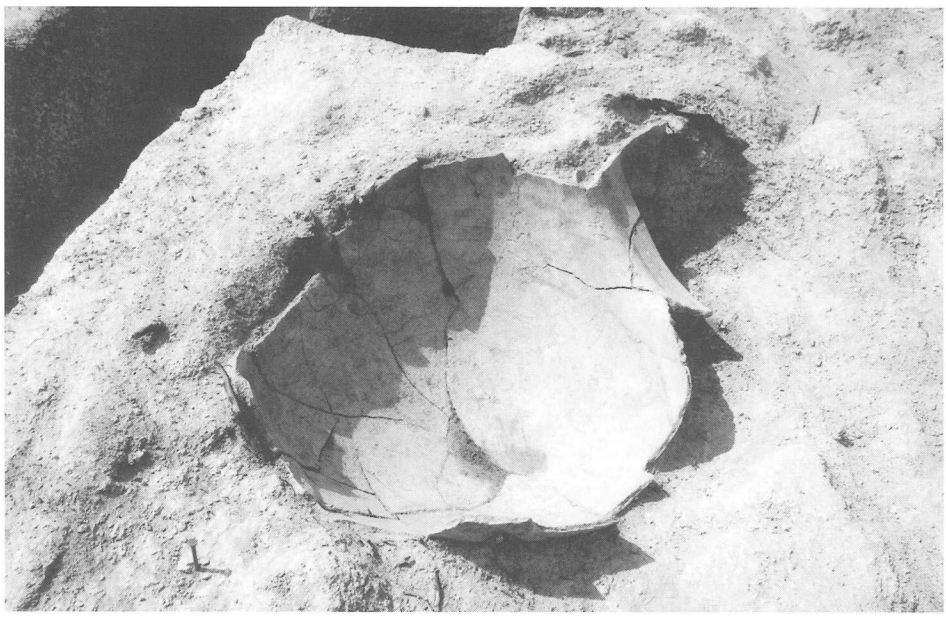


3. 主体部３（北西から）

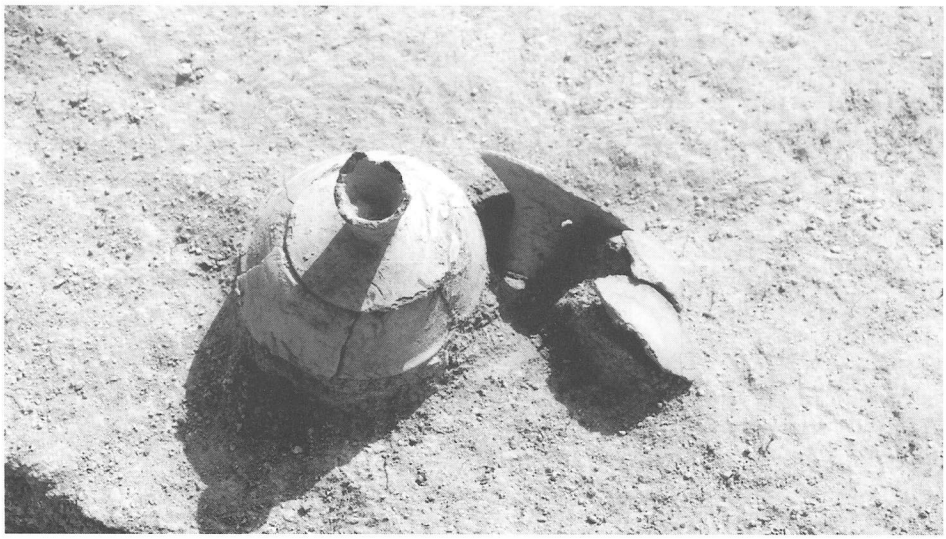
図版６

24号墳

1. 主体部
（北から）



2. 土器棺検出状況
（南東から）



3. 供献土器
出土状況（西から）

25号墳・27号墳

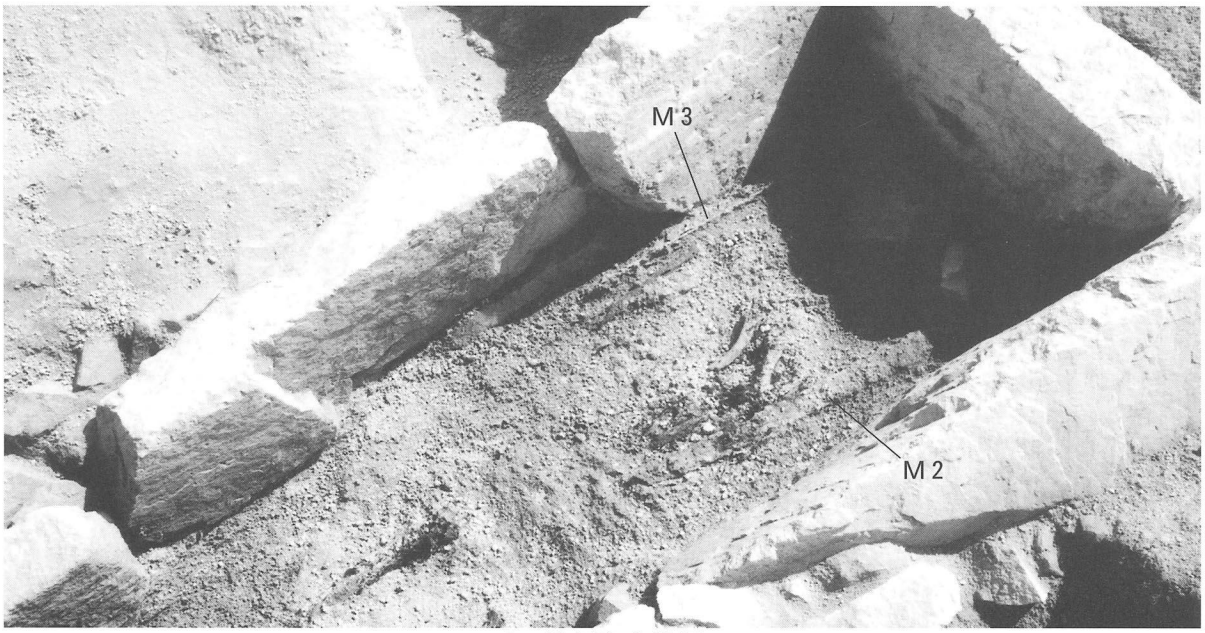
1. 25号墳　主体部
（南から）

2. 27号墳　石棺検出状況（東から）

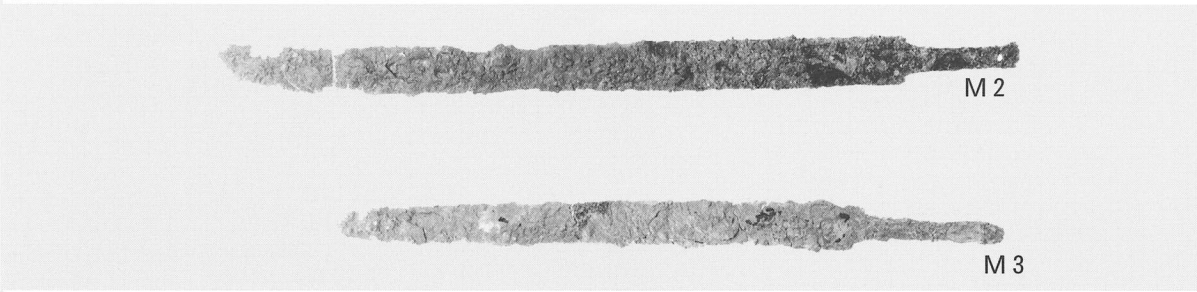
図版８

27号墳

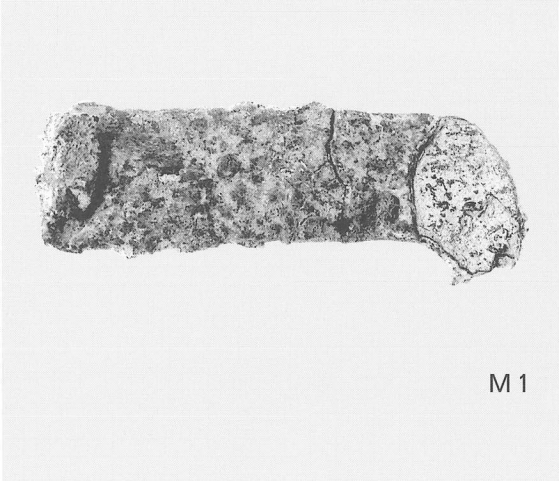
1. 主体部　人骨検出状況

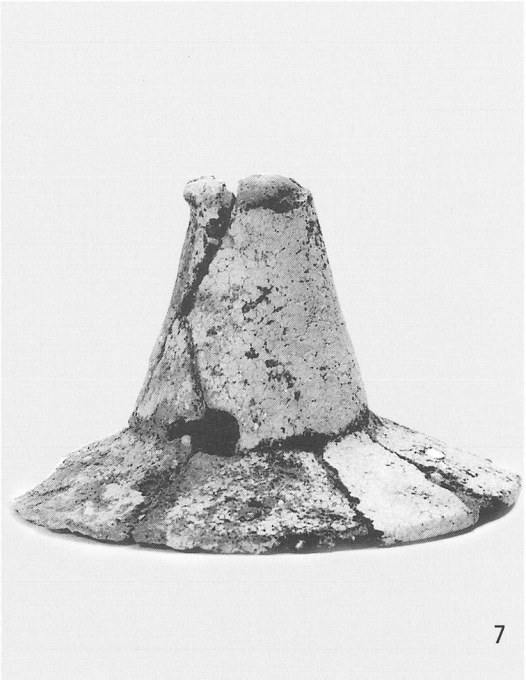


2. 鉄剣出土状況



3. 出土鉄剣





出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みなみさかこふんぐん
書名	南坂古墳群（15号墳他５基）
副書名	
編著者名	西田和浩・白石　純
編集発行機関	岡山市教育委員会　文化財課
所在地	〒700-8544　岡山市大供１-１-１
発行年月日	2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南坂古墳群（みなみさかこふんぐん）	岡山県岡山市（おかやまけんおかやまし） 下足守（しもあしもり）	33201		34° 43′ 14″	133° 48′ 53″	2005. 5.16 ～ 2005. 9. 2	600㎡	土石採集

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南坂15号墳	古墳	古墳時代	木棺１基	土師器・須恵器	供献土器
南坂16号墳	古墳	古墳時代	箱式石棺１基 木棺２基（内１基は粘土被覆）	人骨	箱式石棺から保存状態良好な人骨が出土した。
南坂24号墳	古墳	古墳時代	木棺１基　土器棺１基	鉄鎌・土師器	供献土器
南坂25号墳	古墳	古墳時代	木棺１基（粘土被覆）	－	－
南坂26号墳	古墳	古墳時代	箱式石棺１基	－	－
南坂27号墳	古墳	古墳時代	箱式石棺１基	人骨・鉄剣２本	－

南坂古墳群（15号墳他５基）

発　行　日　2009年３月31日
制作・編集　岡山市教育委員会文化財課
発　　行　岡山市教育委員会
　　岡山市大供1-1-1
印　　刷　片山印刷株式会社